144
特230-615
1200700657562
特230
615

皇道宣揚

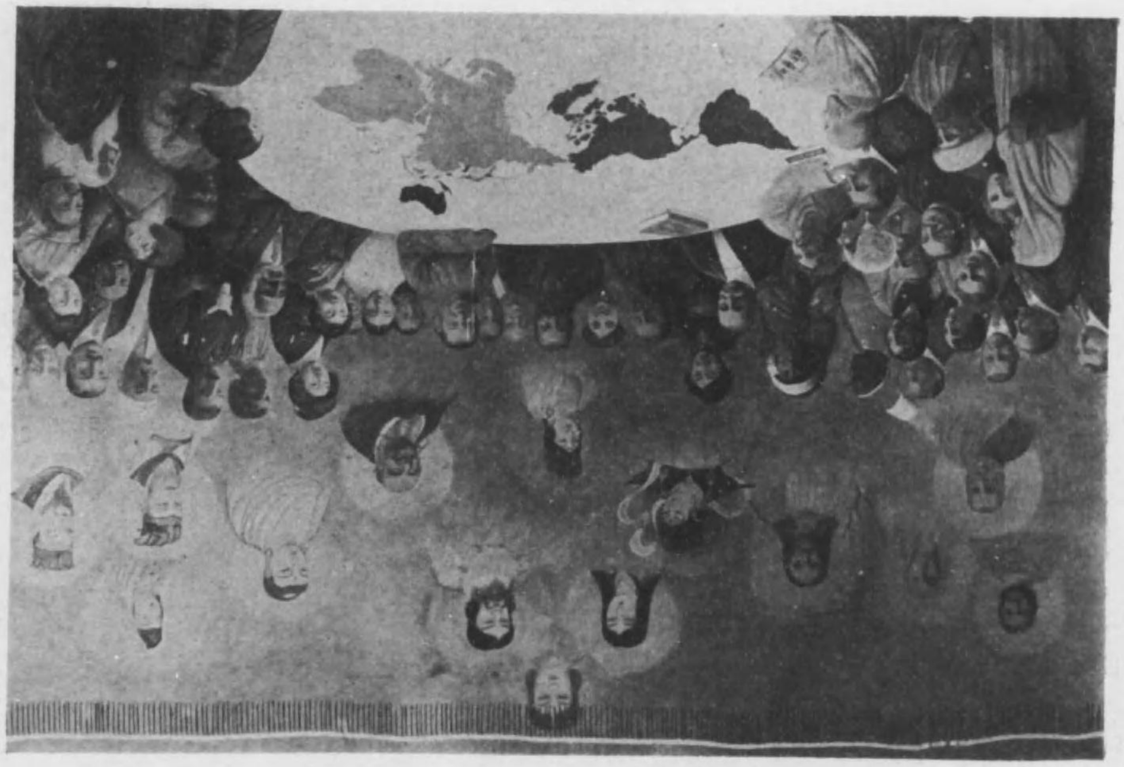
昭和青年會發行

始

特230
615

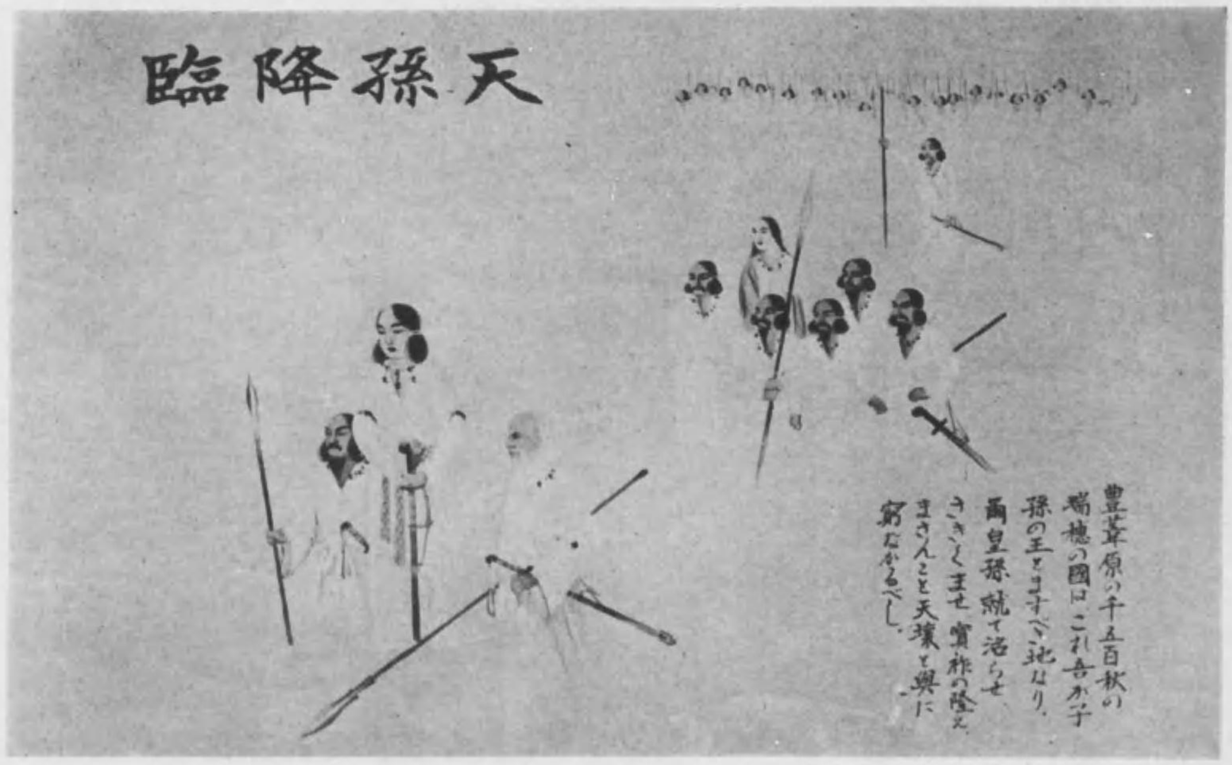
皇道宣揚

昭和青年會發行

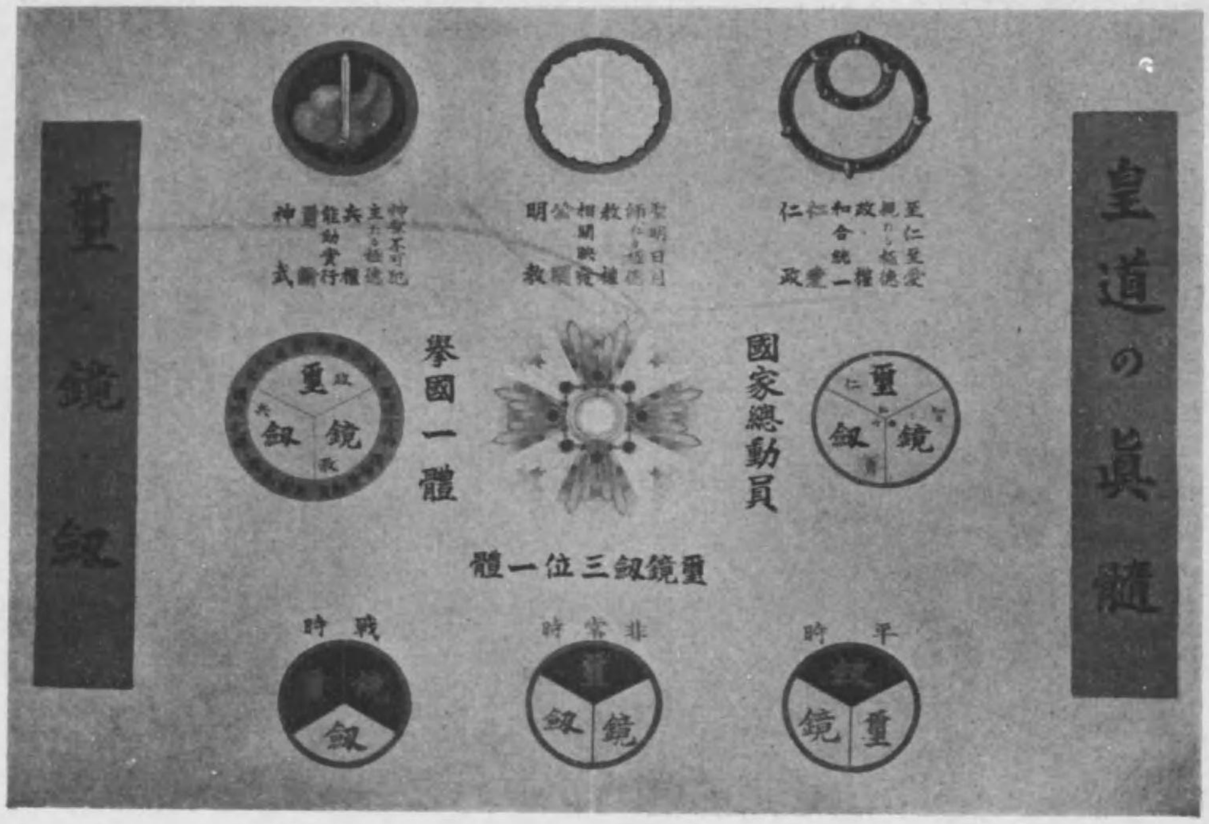


〜界世道皇りよ本日道皇

葦原の瑞穂の國は世界なり
中津御國は日の本の國



豐葦原の瑞穂の國とは萬有の生成化育
すること葦の繁ろが如き全世界をいふ



大偉業の蔭には常に大なる信仰がある

序

大日本皇國對歐米列强の對立抗爭は遂に回避の道なく日に月に尖鋭化し來り、外交戰、政略戰、經濟戰、思想戰は今正に酣にして、經濟戰に於ては快報頻りに至るものあるも、既に列强連衡の暗礁に閉されんとするあり、外交、政略、思想の諸戰線は稍挽回の氣運なきにあらざるも遺憾ながら失敗の情勢にあり、此の如くにして最後の運命を決すべき武力戰に入らんか、戰勝を得て國威を伸張せん事甚だ至難とせねばならぬ。

○

熟々我が外交、政略、思想各戰線敗績の原因を探究するに、物質偏重の泰西文化に心醉し、爲に皇國の大本元たる神明を忘れ、ひいて皇祖皇宗肇國の宏遠と樹德の深厚とを仰がず皇位の尊嚴と國體の精華とを重しとせず、從つて皇國民にして神洲神民たるの信念を失ひ、進んで世界の中樞頭腦國として萬邦を指導すべき皇國天來の一大使命に覺醒する能はず、外尊內卑、徒に歐米列强を畏怖追隨してその鼻息を窺ふによる。

物質文化の進運既に彼等に優るもの日に多くして、尙內卑外尊退嬰軟弱の迷蒙を敢てするの主因

は之を精神力の缺乏に歸すべく、皇道精神の沈衰銷磨こそは叙上各戰線に光なき眞因なりと斷言して憚らない。

○

本會は同志と共に深く皇國の前途を憂慮するの餘り、曩に防空(國防)展覽會を全國並に滿洲帝國に開催し、僅々一年三ヶ月にして開催個所大班小班合計百八十、觀覽者百五十萬を超え、國防峽畫を合すれば觀衆二百萬に達し、その悉くに武力戰への備へを急がしむると共に精神國防充實の急務なるを說いて愛國の聖火をその魂に點じたるに、感激して國防獻金を勵行するの士女相次ぎ、涙を以て迎ふべき獻金美談の多數を生むに至り、我が同胞未だ日本魂を失はずと絶叫して神明に感謝せざるを得ざらしめた。

○

平素皇國民同胞の心奥深く内在して平和を愛好し、一朝君國の大難に處しては、猛然發動して幾多の國難を克服し來りたる傳來の日本魂を、この曠古の大國難の前に呼び覺し、敗退しつゝある政略、思想、外交の各戰線を督勵挽回し、敢然として攻勢に轉ぜしめ、經濟戰には更に盡忠報國の至誠、形而上の資源を無限に供給し、以て勇士の戰場に奮鬪するの決意を以て益々戰果を擴大せしめ、かくて各戰線の綜合的戰勝の基礎の上に武力戰の赫々たる大勝の因を確立し、最善の場合、戰はずして皇國の正義を列强の前に貫徹せんとする、これ本會が皇道宣揚大運動に邁進する所以である。

◉

惟ふに一國對一國の戰爭に於てすら尙且十對六或は十對七の劣勢比率が危險視せらるゝの秋、列强相携へて皇國に迫り來るの現實は、日本魂なき日本人をして慴伏せしむるに足る。そこから軟弱追隨を信條とする非國民の多數を輩出せしめてゐるのだ。

若し地上に日本なかりせば、彼等白人は亞細亞をも南北アメリカの如く、濠洲の如く、アフリカの如く完全に占有搾取する事が出來たであらう。彼等はこの天人共に許さゞる世界征略の野望の爲に連合して、共同の障碍たる正義の日本に迫りつゝあるのである。

故に若し戰はずして日本を屈服し得ば彼等の最も望む所であるから、相率ゐて虛勢を張り威喝を試みてゐる。

○

勞せずして日本を屈服せしむるの道二つ、一は列强合同の一大壓力を以て戰はずして皇國を威服

するの方略、一は皇國に内紛を生ぜしめて其の對外實力を殺ぐの方策である。

今や外よりする彈壓力は政略、外交、經濟、軍備の各方面より集中し來り、更に内よりは政爭、階級闘爭、軍民離間、反戰運動等の陰謀による攪亂の手は伸ばされ、逆宣傳、買收等の策動が續けられる事を覺悟せねばならぬ。

此の二大方略にして彼等の企圖するがまゝに奏功せんか、實に皇國開闢以來の大椿事である。此の如きは　皇祖皇宗の神靈斷じて許し給はざる所であり、傳來の太陽色の熱血脈々として鼓動する天孫民族の斷じて見るべからざる屈辱である。

同胞九千萬の蹶起すべき秋は今だ。

○

此の内外兩道より併進する大敵を撃滅するの一途は『皇道宣揚』の一事に盡きる。

皇道はその眞髓を表徴する璽鏡劍の示すが如く、政教武一體の道であり、よく仁愛に、よく明智なると共によく勇武である。璽は和合統一を、鏡は肝膽相照を、劍は勇斷果決を示してゐる。皇道に立脚する所内紛を來すの不和なく、策動者の乘ずべき暗影なく、脅喝に屈するの怯懦はない。況んや買收に應ずる醜穢の如きをやである。

我にして皇道に更生し舉國一體、正義の爲に死を賭して躍進し、列强は利に集るも各自我慾の爲に眞の團結なくんば、決戰の日必ずや生命を惜み損害を畏れ、爲に外觀の五〇對一〇も二〇對一〇となり、更に嚴密にその内容を檢討すれば一〇對一〇となり或は六對一〇ともなるべく、統一の道皇道を遵奉してよく億兆一心ならば、外よりする壓迫は毫も恐るゝに足らず、皇國の大勝や必せりといふべきである。

○

此の如く内飽く迄固く、精神形體兩面の國防を充實して外敵の乘ずべき釁隙なければ、内憂外患自ら雲散霧消する所、日の本の　聖天子の御光は萬國の上に照り輝き、皇道日本、太陽國日本を中心とする光明世界は現實に顯現し　天祖の神勅は目出度く地上に實現する。

此の如き大信念を涵養し、此の大國難を一蹴し去るの根本原動力――日本魂を呼び覺す、これ吾人の『皇道宣揚運動』に精進する所以であり、亦本書を著して同胞に呼びかくる所以である。

昭和九年九月九日

昭和青年會

はしがき

一、皇道はもと天地惟神の大道の皇國に具現したるもの、その生命に古今なくその運用に中外はない。更に靈體兩面に亙り神人兩界に關する。

本書は特に皇道の世界的宇宙的・偉大性と天壤無窮の永遠性とを明かにし、國史を世界的に廣く又現代的に新しく活かすことにつとめた。

一、我が　皇祖皇宗肇國の宏遠と樹德の深厚を明かにする事は皇道の要である。宇宙の主神なる皇大神と　皇位、天皇と皇國民と世界人類、日本と世界等、皇道の根幹を闡明し、一大信念一大信仰迄突入せしむる事が本書の念願とする所である。

一、近時皇道を求むる聲皇道を叫ぶ聲は大潮の寄するが如く怒濤の巖を嚙むが如く津々浦々を動かし來つた事は皇國日本の慶福である。

本書は非常時皇國を擔つて起たんとする至誠の士女の聲に應じ求めに應じてその伴侶たらんとするものである。

一、口繪と挿繪は共に全國的に行ふ『皇道宣揚展覽會』に使用する資料の實寫であつて、本會の獨創的表現にかゝるものゝ若干であり、皇道の重要なる諸點を一目瞭然たらしめたものである。

昭和九年九月九日

有留弘泰

皇道宣揚

目次

序文……一
はしがき……六
一、緒言……一
皇國日本の責務……一
二、天佑神助と皇道精神……五
1、大偉人と信仰……五
2、東郷元帥と天佑……一〇
3、日露戰爭大勝の眞因……一二
4、日本海の大勝(撃滅)……一六
5、陸海一致(七了口上陸)……一九
6、伊勢の神風(元寇)……二三
7、大國難を大國福への道(燒津の神劍神火神風)……二四

三、肇國の大精神……二七
1、皇國の大使命(日本と世界の比較對照地圖)……二七
2、漂へる地球(天津神の神勅)……三〇
3、天孫降臨(天壤無窮の神勅)……三二
4、日を負うて進む天軍……三三
5、六合一都(神武奠都の詔勅)……三六
6、明治天皇御宸翰……三七
7、天に一日地に一君……四〇
四、皇國・皇位の尊嚴……四三
1、神國に刄向ふ主權は亡ぶ……四三
2、天位を覬覦するものは亡ぶ……四四
イ、大極殿の血雨……四五
ロ、宇佐の神勅……四六
ハ、天誅の征矢……四七
五、思想戰……四九

1、八岐の大蛇……四九
2、フリー・メーソンの世界征略運動……五一
3、鷸蚌の爭(漁夫の利)……五五

六、經濟戰……五八
1、經濟戰今酣なり(世界に雄飛する日本商品)……五八
2、平時は金、戰時は人・物……六一

七、農は天下の大本……六五
1、聖主と名將(明治天皇とグラント將軍)……六五
2、仁德天皇仁慈の大詔……六六
3、農は天下の大本なり……六七

八、非常時日本の女性……七二
1、天地開明(天宇受女命)……七二
2、犧牲(弟橘姫命)……七三
3、神示の外征(神功皇后)……七四
4、南朝の柱石(小楠公の母)……七五

5、異國に香る(鄭成功の母)……七八
6、遊女・喜遊(番外)……八〇

九、國辱條約の清算……八一
1、國辱華府條約を卽時廢棄せよ……八一
2、噫!! 友鶴!!……八七
イ、友鶴將兵の遺書……八九
ロ、岩瀨艇長の遺書……九〇

一〇、皇化宇內……九二
1、大義名分(大英雄卽大忠臣)……九二
2、神勅の實行(征韓論卽救韓論)……九三

一一、皇國の光榮……九五
1、宇內歸一の神國……九五
2、世界の頭腦國日本……九九
3、日出づる國の大業……一〇二
4、皇道・王道・覇道……一〇四

一二、皇道の具現……一〇九
1、皇道の旗幟・日章旗の尊嚴……一〇九
2、祭政一致……一一三
3、皇道の眞髓・璽鏡劍……一一六
一三、結言……一一〇
皇道日本より皇道世界へ……一一〇
跋に代へて……一一三
1、爆彈三勇士……一一三
2、純忠至誠乃木將軍……一二四
3、銃後と戰線……一二五
4、至誠の一厘……一二七

目次終

一、緒言

皇國日本の責務

平和の守護神・力の守護神

日本は今や新しき日本を產まんとして產みの惱みにある。追隨日本・軟弱日本を生むべきか、自主日本・强力日本を產むべきか？若し前者の如く女の如き日本を產まば、列强は忽ち之を呑み喰ふであらう。須らく後者の如く男の如き日本を產んで列國を支配すべきである。

聖書、ヨハネの默示錄に左の如き一節がある。

『爰に大なる異象天に現る。一人の婦あり、日を着、月を足の下にふみ、首に十二の星の冕を戴けり。彼すでに孕み居りしが、子を產まんとして甚く苦み泣き叫べり。

また一つの異象天に現はる。一條の大なる赤き龍あり、之に七つの首と十の角あり、七つの冕を戴けり、その尾にて天の星三分の一を曳き之を地に墮とせり。此龍、子を產まんとする婦の前に立ち產を待ちて其の子を喰はんとす。

婦は男の子を生めり、其子、鐵の杖をもて萬國の民を主理らんとす。彼神と其寶座の下に擧げられにり。云々』

此の默示の眞意が那邊に存するかは問はず、之に日本の現狀を比較して考ふる時、一の貴重なるヒントを與へられる。

皇國日本

婦は正に天照大神の直系日本皇室を表象し、日の尊嚴を靑、月の慈愛に立脚し、古より日月並び輝く神の國である。十二の星の冕を戴けるは、その世界統一の使命を物語つてゐる。（太古世界を十二の國に分ちて治められたる事神示に見ゆ）

今やその大使命を達成せんとする產みの惱みにある。而も女を產まば唯物思想の赤き龍に喰はるべく、斷じて男の子即ち自主日本、强力日本を生んで鐵の杖の如く堅確なる決意と曲らざる眞理とを以て萬國の民を主理らねばならない。

而も七つの頭を有する赤き龍は、米英佛伊獨露和等の覇道列强と見るべきである。十の角は諸種の武器を意味してゐる。

○

編者は昭和九年四月印刷の支那の使用する國防教育掛圖なるものを見たが、これは支那邊境に向つてする各國の軍備を圖示したもので之によれば如何に列强が支那を奪

の責務

はんとして（神示のよき支那物を奪はんと）準備しつゝあるかを覺る事が出來る。

外蒙及び新疆は露西亞の勢力範圍となり西藏は英國、雲南、廣西は佛國の勢力に壓せられてゐる。

支那は日本を見る事他の列强の如く侵略國と看做し、列强の煽動に應じて排日侮日抗日を敢てするも、試みに思へ東洋に若し日本なかりせば、支那はアフリカ大陸と同樣白人の分割する所となり了る事必然である。

又アジアには弱小獨立國の若干を存するも、アジアに若し日本なかりせば、アジアは悉く赤き龍なる獸米人に併呑せらるゝ事アフリカ、濠洲、南北アメリカ大陸と同一なるべく、日本は正に平和の守護神として、又力の守護神として、赤き龍よりその併呑せる世界を奪還し、地上の人類をして等しく平和と幸福とを享受せしめねばならない。

○

然るに世界は精神的に赤き龍の猛毒に中てられ、赤き龍の現實的武裝は甚だ强大なるものがある。善と惡との最後

の大戰ひは將に東洋の天地に開かれんとする。

故に形ある國防の充實を計ると共に、之を運用するの原動力たる皇道精神の宣揚によつて無形の國防を全うし、全人類を救濟し地上永遠の平和を確立せねばならぬ。これ吾人が皇道宣揚を絶叫して同胞に呼びかける所以である。

二、天佑神助と皇道精神

無神論は大逆の母である。神を否定するものは恐れ多くも皇太神宮を否定し、天孫降臨の神聖莊嚴なる事實を無視し、ひいて天津日嗣の日の御子なる地上唯一の天立君主にまします日本天皇の尊貴を肯定しない。神を抹殺する以上地上に神權者の存在を絶對に認めない、彼も人なり我も人なりてふ觀念が主體となり、遂には國體變革等の大逆をも敢てするの不逞の徒と化り了るのである。

故に無神論の嫩葉にして刈り取り、有神の活事實の前に叩頭せしめねば、共產主義者の如く斧鉞を以て屢々幹を伐るも、不斷に新しい芽を吹いてその應接に追なからしめるものである。

神靈の實在とその階級、神靈の偉大なる力と人生に及ぼす重大影響等に就て編者は無數の體驗を有してゐるが、此には極めて通俗的に大偉人の信仰に就て一言し、最後に實例をあげて之を證する事とした。

1　大偉人と信仰（口繪五參照）

明治天皇はもとより現津御神にましまし、大偉人などゝ比べ奉るべきではない。而もこの至尊の御身を以て敬神の大御心殊に深く、詔勅に、御製に、神祇を敬ふべき事、祭政の一致なるべき事を訓へ給ひ、常に身を以て衆に先んじ敬神の範を垂れさせ給うた。

明治元年三月十四日の『五個條の御誓文』の末文にも

『我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ　朕身ヲ以テ衆ニ先ンシ　天地神明に誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス』

と仰せられ、同年十月十七日『祭政一致の詔』には

『神祇ヲ崇ヒ祭祀ヲ重ンスルハ皇國ノ大典ニシテ政教ノ基本ナリ』

と訓へられてゐる。

御製を拜しまつりても
目に見えぬ神の心にかよふこそ
人の心のまことなりけれ

我國は神のすゑなり神まつる
むかしのてふり忘るなよ夢

神風のいせのみやゐををかみての
後こそきかめ朝まつりこと

の如く、信仰祭祀敬神を如何に體現實行し給ひしかを窺ひ奉る事が出來る。かくて天禀の一大神格と相俟つて神人合一の神境を具現し給ひ、常に艱難の先に立たせられ、國民の嚮ふ所を明かにし克く明治の大業を成就し給うたのである。此の大神そのまゝの御示範と御指導とを仰ぐにあらざれば、如何に忠臣良弼の補翼ありと雖も明治の驚異的進

展は不可能であつたであらう。左に日露開戰前御前會議の一例をあげてその御稜威をたゝへまつる事とする。

○

日露の風雲は愈切迫した。我陸海の軍備は驚くばかり發達を示したとはいへ、露國は名にし負ふ世界の强國である。陛下當時の御軫念は仰ぎまつるも畏き程であつたが、而も陛下は御前會議に於て、唯一言『戰ふ』とのみ斷乎として仰せ出された。其神明に等しき御明斷は洵に快刀亂麻を斷つの概があらせられ、さしもの大問題も即座に決定を見るに至つた。

○

明治維新の元勳大西郷は常に

『天を相手にせよ!!　人を相手にするな!!』

と訓へられた。『天』とはもとより大空の事ではない。神樣の事である。

大西郷は常に神樣を相談相手とし、神の御心を心として至誠を盡し、よく維新の大業を翼贊し奉つたのである。

ヒンデンブルグ元帥　物質科學の世界に冠絶する獨逸國民の崇敬を一身に集め、復興ドイツの指導星として今日の大を成さしめたに就ては、何といつてもヒンデンブルグ元帥の功績が多大である。而も元帥は決して單なる武人でもなく政治家でもなかつた。

歐洲大戰の當初レネンカンプの率ゐるロシアの大軍が大擧して獨逸の東部線に襲來するや、その半數に近き兵力を以て之をタンネンベルヒに擊破し、九萬の捕虜と三百五十門の大砲を獲た。この大勝に將士が手の舞足の踏む所を知

らぬ歡喜の眞只中に元帥の行衛が知れなくなつた。狼狽して尋ね廻つた副官は、と或寺院の神前にぬかづいて靜かに默禱を捧げてゐる神の如き將軍の姿を見出してホット安心の胸を撫で下すと共に强烈な感激に打たれたのである。——この神と共なる名將にして名大統領も、今はタンネンベルヒの地下に安らかに遺骸を横たへてゐるのだ。

嘗てありし日、大統領官邸の元帥の机上には純銀の文鎭が置かれ、それにはラテン語で

『祈れ!! 而して、働け!!』

と記してあつた。以てその平素の信仰を察すべきである。

○

古來不朽の大業を爲し、名を竹帛に垂れる程の偉人は殆ど例外なく神樣を信仰してゐた。淸廉公、菅公、楠公皆然りである。明治維新の志士の多くもそうであつた。之を泰西に見るも、かの大英雄ナポレオンをウオーターローの一戰に擊破して英名を天下に轟かし、後大英國の宰相となつた

ウエリントン公は

『宗教に由らずして人を教育するは、佞倆ある惡魔を造るなり』

と喝破し、米國近世の快男兒

テオドル・ルーズベルトは

『神を信ぜよ、然して汝の義務を盡せ』

と言ひ、隨分古い話だがカルタゴの名將

ハンニバルは

『神意に背きては、一事をも爲すこと能はず』

と叫び、近世英雄の第一位に置かるゝ

大ナポレオンさへ

『萬事萬端神の存在を示す』

と感嘆の聲を洩してゐる。又トラファルガルの大海戰に於ける英國の大提督

ネルソンの最後の言葉は左の通りであつた。

『我今本分を盡し得た、これを以て上帝に感謝す』

更にアメリカの大統領

リンカーンとウイルソンが、一は奴隷解放なる大事業を貫徹して人道に不滅の光輝を添へ、他は歐洲大戰參加の時機を適切に捉へて、米國をして一躍世界の覇者たらしめたのであるが、共に神靈よりの指示に從へるものとされてゐる。又、

發明王エヂソンの如きも父祖三代の神靈主義者であつて、發明と靈感とは切つても切れぬ深い關係がある事を忘れてはならぬ。

○

然るに神靈の存在を抹殺して科學萬能黃金萬能の、單に物質世界の半面の眞理さへも完全に捉へ得ない科學に迷信

して、小賢しくも神を否定し靈を無視し、唯人間の小智小才を誇るのが、こゝ暫くのハヤリヲ兒であつたが、其の結果は今日の上げも下しもならぬ行詰りの世を造つて自ら持て餘してゐるに過ぎない。

神國日本の神民は悉く神靈に目醒る事が最大急務である。

2　東郷元帥と天佑神助

東郷元帥は神様を信じ、極めて純眞なる信仰の持主であつた。而もその信仰を大膽率直に、或は命令、訓令に、或は大本營への報告文に、さては勅語に對す奉答文中に迄明記せられてゐるのである。

『天佑を確信して聯合艦隊の大成功を遂げよ』（旅順口の露艦撃破の爲の命令末文）

『各員は天佑を確信し、同心協力勇往邁進して此れが成功を遂ぐべし』（第一回旅順港口閉塞隊への命令）

『只天佑と確信するの外あらざるなり』（旅順口第八次攻撃報告末文）

『歴代神靈の加護に依るものにして、固より人爲の能くすべき所にあらず』（日本海戰勝に對し賜りたる勅語の奉答文）

而して東郷元帥の天佑神助に關する信仰は次の如くである。

『天佑神助といふものは必ず在ることゝ信じて居る。但しこれは漫然としてゐて受け得られるものでは無い。惟ふに天佑神助は至誠の反映であるから、之が實現せざるは至誠が足らないものと反省し、益々至誠を盡さねばならぬ』

而して元帥の天佑神助に關する標語は左の通りである。

『天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず』

元帥をして言はしむれば、天佑神助を得られないのは至誠が足らない證據である。然らば神の實在や天佑神助を認め得ないものも亦同然である。

皇大神宮の靈光　東郷元帥は日露戰役の凱旋に際し十月十八日先づ第一に　皇太神宮に參拜し、神國日本の將帥として最善の範を垂れられたのである。今小笠原長生子の筆に成る一文を轉載して當時の光景を偲ぶ事とする。

『凱旋の際には先づ第一に艦隊を率ゐて伊勢灣に回航し、自身は聯合艦隊司令長官として、片岡第三艦隊、上村第二艦隊、出羽第四艦隊の各司令長官、三須、山田兩司令官及び幕僚、艦長等を隨へて上陸し　皇太神宮に詣で、神官の案内に依りて西御門より入り、隨員は西石壇に整列し、東郷長官一人内玉垣南御門に進み、右手に帽を取り、左手に劍の柄を握つて最敬禮をなし、**恐る〳〵見上げ奉る　宮居は、靈光赫灼として目前在すが如く、神威に接心したる東郷長官の面上得も言はれぬ感激に色彩られ、**默禱して不斷の神助を奉謝し、戰捷を奉告し、愈皇國守護の靈驗を祈つた。時に細雨塵埃を鎭めて神苑の常磐木一段の生彩を放ち、神氣四邊に滿ちて心身共に清淨を覺えしめたのは、大神も東郷長官の純信至誠を御嘉納あらせられたものと推量られて、有難さ申す許りも無かつた。』

恐る〳〵見上げ奉る宮居は靈光赫灼として目前在すが如く、神威を拜し奉りたる東郷長官の敬虔と感激の面貌さこそと察せられて畏く　皇太神宮の神代乍らの大御稜威を今の世にも拜し奉り、無神無靈魂の迷ひの夢も忽ち醒めるの思ひあらしむ。

この嚴厳なる事實を推して天神地祇八百萬の神に及ぼし奉るの時皇位の萬世一系天壤と共に窮みなく、皇國に事ある毎に世を守らす神のしるしの著しきいはれを明かに覺る事が出來ると共に、大磐石の信仰を得られ、一度この大信念に到達するの時、武人は愈〻強く、政治家は愈〻正しく、宗教教育思想家はよく神聖に、富豪も地主も勞働者も小作人も、一切を擧げて悉くその本分を盡し、神に對しては信仰を、君に對しては忠節を完うし、日本をして眞の皇國眞の神國たらしめ、世界萬國を悅服信從せしむる世界の光華たらしめ、眼前に展開する各種の國難の如きは忽ち解決し得る事易々たらんのみである。

（原畫は黃色を主色とした莊嚴なる繪である）

3　日露戰爭大勝の眞因

日露戰爭に於ける日本の赫々たる戰勝は全く各國を愕然たらしめた。

その戰勝の原因が那邊に存するかは各國の眞劍に探究する所となり、各〻之に就て自國民を誡め或は軍人を訓諭する所があつたが、その綜合的結論は『國民精神の剛健に在り』の一點に歸着してゐる。

イギリスは『明治天皇より賜はりたる教育勅語の御精神を、日本五千萬の同胞が悉く實行したるによる』となし勅語の精神を英國民に徹底普及する目的を以て、澤柳政次郎博士を招聘し各地に講演を行つた。

アメリカ大統領ルーズベルトは、東鄕司令長官の聯合艦隊解散に際して與へたる訓示の精神によるとなし、陸海軍に對し一般命令によつて、右訓示の要點を譯したるものを配布した。米國陸海軍に外國の精神を採用したのは嘗て例のない事とされてゐる。――又新渡戸稻造博士の著した『武士道』は米人に多大の賞讃を博し、日本の大勝は實に武士道の精神によるものとされてゐる。

ドイツのカイゼルは、日露戰爭の始まるや『ロシヤは白人の爲日本と戰ひつゝある。この北ヨーロッパの白熊は、東方の小さい黃色な猿を一蹴りに蹴倒すであらう』と斷言し、興味を持つて觀た程であるが、豫期に反して日本の大勝を見るに至り黃禍論を唱へて白人に警告を發したが、自國軍隊に對しては『日本は　明治天皇より賜はりたる御勅諭の精神によつて勝つたのである。この五ヶ條が日本軍人の精神であつてドイツ軍人はこの精神に學ばねばならぬ』と教訓してゐる。

東鄕長官の訓示の通り、武力なるものは艦船兵器の精鋭優秀多量にのみよるものではなく、全く之を運用する無形の實力即ち精神力――魂の力――神の力――による事頗る多大である。

これこゝに皇道精神の發揚を促す所以である。

聯合艦隊解散の訓示

二十閲月の征戰已に往事と過ぎ我聯合艦隊は今や其の隊務を結了して茲に解散することゝなれり。然れども我等海軍軍人の責務は決して之が爲めに輕減せるものにあらず。此の戰役の收果を永遠に全くし尚益々國運の隆昌を扶持せんには時の平戰を問はず先づ外衛に立つべき海軍が常に其の武力を海洋に保全し、一朝緩急に應ずるの覺悟あるを要す。

而して武力なるものは艦船兵器等のみにあらずして、之を活用する無形の實力に在り。百發百中の一砲能く百發一中の敵砲百門に對抗し得るを覺らば、我等軍人は主として武力を形而上に求めざるべからず。近く我が海軍の勝利を得たる所以も　至尊の靈德に賴る所多しと雖も、抑亦平素の練磨其の因を成し、果を戰役に結びたるものにして、若し既往を以て將來を推すときは征戰息むと雖も安じて休憩すべからざるものあるを覺ゆ。

惟ふに武人の一生は連綿不斷の戰爭にして時の平戰に由り其の責務に輕重あるの理無し。事有れば武力を發揮し事無ければ之を修養し、終始一貫其の本分を盡さんのみ。

過去の一年有半彼の風濤と戰ひ寒暑に抗し、屢〻頑敵と對して生死の間に出入せしこと固より容易の業ならざりしも、觀ずれば是れ亦長期の一大演習にして、之に參加し幾多啓發するを得たる武人の幸福比するに物無し。豈之を征戰の勞苦とするに足らんや。**苟くも武人にして治平に偷安せんか、兵備の外觀巍然たるも宛も沙上の樓閣の如く暴風一過忽ち崩倒するに至らん、洵に戒むべきなり。**

昔者神功皇后三韓を征服し給ひし以來韓國は四百餘年間我が統理の下にありしも、一たび海軍の廢頽するや忽ち之を失ひ、又近世に入り德川幕府治平に狃れて兵備を懈れば、學國米艦數隻の應對に苦しみ、露艦亦千島樺太を覬覦するも之と抗爭すること能はざるに至れり。

顧つて之を西史に見るに十九世紀の初めに當りナイル及びトラフアルガー等に勝ちたる英國海軍は祖國を泰山の安きに置きたるのみならず、爾來後進相襲で能く其の武力を保有し世運の進歩に後れざりしかば今に至る迄永く其の國利を擁護し國權を申張するを得たり。

蓋し此の如き古今東西の殷鑑は爲政の然らしむるものありしと雖も、主として武人が治に居て亂を忘れざると否とに基ける自然の結果たらざるは無し。我等戰後の軍人は深く此等の實例に鑑み既有の練磨に加ふるに戰役の實驗を以てし、更に將來の進歩を圖りて時勢の發展に後れざるを期せざるべからず。

若し夫れ常に、聖諭を奉體して孜々奮勵し、實力の滿を持して放つべき時節を待たば庶幾くは以て永遠に護國の大任を全うすることを得ん。神明は唯平素の練磨に力め戰はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授くると同時に、一勝に滿足して治平に安ずる者より直に之を覗ふ。古人曰く勝て兜の緒を締めよと。

明治三十八年十二月二十一日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

4 日本海の大勝（撃滅）

天佑神助顯なる皇國に於ては、國民の一部に動もすれば天佑神助を僥倖して軍備の充實と平素の鍛練を輕視せんとするものがあるのは甚だ遺憾である。

國民にして非常時の備へを怠り、軍人にして訓練を忽にする者は、既にその至誠に於て缺くる所あり、努力に於て不足する所あり、眞の神の御旨に反するが故に、必ずや戰敗を以てその怠慢を酬いられ、破滅を以てその不心得を懲うたるゝは必然である。

神と人とはその努力すべき領域（分野）を異にする。――渾身の至誠を捧げて君國に負へる自己の本分を盡す所、換言すれば、人事の最善を盡して天命神命を待つ所、神その献身努力の至誠をみそなはして、天佑神助を垂れさせ給ふものである。

○

抑日露戰爭は、皇國の正義、露佛三國の横暴に跳躍せられたる遼東還附以來、國民悉く臥薪嘗膽正に一心一體となつて戰備を急ぎ、開戰以來火の玉の如き熱と團結とを以て露國の膺懲に驀進した。

加ふるに日本海の大海戰は、彼のZ旗の指し示す如く全く皇國の興廢の因つて決せらるゝ所、全國民の悉く、佛教徒たると基督教徒たるとを問はず貴賤老若男女を論ぜず、體的に爲すべきを爲し了つて更に精神的總動員の下に一心に神佛の祈願にまで突入した。

況んやこの大任を双肩に擔ふの將帥大東郷、一點の私心なく、滿身これ敬神尊皇愛國至誠の權化、而も部下の忠勇を信じ、必勝の信巖の如く動ぜざる事山の如し。――參謀亦寢食を忘れて作戰を練り、將兵各其分を盡し、武技の演練克く百發百中を確信する。

贈既に戰はずして敵を呑み、技既に戰はずして敵に勝つ『神明は唯平素の練磨に力め、戰はずして既に勝てる者に勝利の榮冠を授く』なる東郷提督の言の如く赫々たる戰勝は神明によつて授けられたのである。

天佑神助に關し無神論者は兎角の言を爲すものあるも、日本海々戰詳報（六月二日着電）によれば、當時將兵が如何に天佑神助を信じ得たかゞ明瞭である。

日本海々戰詳報

（前略）

天佑ト神助ニ因リ我聯合艦隊ハ五月二十七、八日敵ノ第二、第三艦隊ト日本海ニ戰ヒテ遂ニ殆ド之ヲ撃滅スルコトヲ得タリ。

（中略）

此對勢ニ於ケル敵ノ兵力我ト大差アルニアラズ、敵ノ將卒モ亦其祖國ノタメニ極力奮鬪シタルヲ認ム。然モ我聯合艦隊ガ克ク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇蹟ヲ收メ得タルモノハ一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ固ヨリ人爲ノ能クスヘキニアラス、殊ニ我軍ノ損失死傷ノ僅少ナリシハ歴代神靈

ノ加護ニ依ルモノト信仰スルノ外ナク、翻ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾下將卒モ皆此成果ヲ見ルニ及ンデ唯々感激ノ極言ヲ所ヲ知ラザルモノノ如シ。

右の報告文は、當時將兵の眞摯なる主觀であり信仰であつて、無神論者、物質萬能迷信者の外部より批判すべき限りではない。

○

加ふるに時の　皇后陛下の御夢に土佐の海援隊長坂本龍馬現はれ、バルチック艦隊の擊滅を誓ひ、御心を安んじ奉る旨を奏上し、而も其の姿がその寫眞と酷似したる事實、或は日本海々戰の花形役者たる秋山參謀が、五月二十四日の眞夜中、靈夢によつてバルチック艦隊の對馬南水道を通過前進し來る場面を明瞭に見せられ、而も二十七日初めて秋山中佐の双眼鏡に入りたる敵艦隊の隊形、艦の順序、配列が夢と全く同一であつた事實、その他實蹟に加はりたる將兵の體驗談等を綜合すれば、如何に天佑神助があらたかであつたかを覺る事が出來るのである。

○

大日本は神國である。神と靈は永遠に死滅する事はない。至誠は神に通じ、正しく直き人々の頭に神は宿らせ給ふ。

『文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ衆庶各其ノ業務ニ淬勵スル』所、神佑至り、神人合一茲に無限の權力を發揮し得るを覺るべく、此の强烈なる信念の存する所、正しきを履んで進まば世界を敵とするも敢て恐るるには當らない。

5 陸海一致

七了口上陸

皇國を呪ふ異邦の策動は、皇軍と政治家とを對立せしめ、或は軍民を離間せしめ、或は勞資を抗爭せしめんとしてゐる。これ內紛によつて皇國の力を弱め勞せずして之を制し、漁夫の利を占めんが爲である。故に如何なる策動にも動ぜず擧國一致、軍民一體、海陸共同、政、教、軍一體の實をあげ此の非常時を克服して世界の指導者とならねばならぬ。

茲にその好模範として陸海共同作戰の美しき事實を紹介し、之れに與へられたる天佑神助に就て述べる事とする。

第九師團の上海戰參加は國際聯盟に於て日本を侵略者と看做すに至つた。日本は支那と戰爭はしない、唯日本の既得權益を蹂躪せんとする十九路軍を制御してゐるに過ぎない。彼にして五里後方に退けば戰爭行爲を中止する旨を中外に聲明し、白川軍司令官は十九路軍に對し後退を要求したが彼は之に從はなかつた。

聯盟は遂に三月三日總會を開いて日本に勸告案を突きつけんとするに決した。日本軍の上海にある兵力は支那軍より著るしく少數であり現在の實力を以てしては一擧に敵を上海の郊外五里の線に擊退する事は相當困難である。而して陸兵を更に送るも上海の正面からでは地域が狹小で、はか〴〵しい戰況の發展を見る事は出來ない。最も妙策は揚子江本流吳淞の上流約十五里の七了口附近に上陸して敵の背後を脅威するにあつた。

而も期日が迫つてゐるので運送船を集めてゐては間に合ず一萬噸級の巡洋艦と一等驅逐艦、何れも一時間三十三海里の快速、之に陸兵を積んで全速力で走る外その方法はなかつた。然るに

揚子江は川幅五里の大河である上、二月末から三月はまだ季節風と云つて昨年の晩秋から止め度もなく續く北風が南岸に吹きつけ、水流も亦急で上陸など思ひも寄らぬ有様である。出先からの報告は何時この風が吹き止むか全く見當は取れず、折角軍艦を使用し現地に到着しても、上陸が出來ねば大變である。問題は當然軍令部と參謀本部との間に議となり、恐れ多くも　兩總長の宮殿下の御熟議となり、遂に決行を見るに至つた。

十八隻の快速艦は四國に廻され、第十一師團は應急動員を以て二月二十七日某々港を出帆した。途中海は折柄の北風、風速は十五六米で波は高く非常に荒天であり、殊に內地は降雪で山も町も眞白であつた。

內地の海岸を通過したのは夕方であるが、この大事を察したのであらう、多數の人々が集つて來て手に〳〵國旗を振り乍ら萬歲を歡呼する。海陸の將兵は思ひ設けぬこの見送りに今更感激の涙を呑む。こゝにも期せずして美しい軍民一致の實が擧げられた。

海軍の將兵は陸兵に善い甲板を譲り、自分は上甲板で濕鼠となつて我慢をする。船に慣れぬ陸兵、大荒に全速力、隨分苦しんだが、到着すれば直に戰場に立働かねばならぬ。船暈を耐へて銃の手入をしてゐる陸兵の數々が見受けられる。これを思ふ海兵は陸兵の接待係を設け力の限り之をいたはる。その美しい陸海一致の友情は、正に天地の神も感動せらるゝやに思はれた。

二月二十九日揚子江口に着いた頃も吳淞に碇泊中も大荒れであつたが、愈〳〵三月一日未明七了口に上陸を始める頃

には北風はピタリと止み、水の流れも緩かに、空には有明の月淡く下界を照らして舟艇への移乘と河岸への達着を容易ならしめ、萬事が誂へ向きであつた。

眞先に海軍の陸戰隊が上陸し、軍艦よりは盛に援護射擊が行はれ、續いて陸兵の上陸となり、全軍は見事半日で上陸を終つた。

此の上陸を知つた蔣介石直轄の約二師團が之を妨害せんとトラックに兵士を滿載して現場に急行したが、航空母艦加賀の艦載機に擊滅されて目的を達する事が出來なかつた。

敵はこの不意の背後への我軍の出現に泡を喰つて退却する。我軍は之を追擊して五里の線に進出し、白川軍司令官は停戰命令を下し、その旨政府に報告する、政府は直にジュネーブに打電した。

この通告は三月三日午前十時、聯盟總會開始時刻十一時に先立つ僅に一時間を以て到着したので、握り固めて日本の頭上に加へんと待ち構へてゐた約五十の拳骨はその遣り場に困つて了つた。

茲に驚くべきは、北風の止んだのは上陸當日だけで、翌日からは前同樣の大荒れであつた。

神明は儼として實在し常に正義を守り給ふ。然れども皇國は常に天佑神助ありとし之を輕々に考へるは誤れるも亦甚だしい。

國民の力の限り盡してし
後こそ吹かめ伊勢の神風

こそ眞の天佑神助である。國民の　悉　くが熱誠之を支持し、陸海軍亦共に最善を盡し相愛し相助ける。その至誠神明

に通じて此の天佑神助を賜はりたるを牢記し、夢にも擧國一致と陸海一致の重要性を忘れてはならない。

若し之を忘れて異邦と共賊の策動に惑はされ國内の統一一致を破るの時、神明は天佑神助を我等の手より奪ひ給ふのみならず、必ずや大鐵鎚を頭上に加へて之を懲戒し給ふであらう。

6 伊勢の神風（元寇）

蒙古の來襲に就て、人多くは伊勢の神風をのみ信じ、十萬人中生還するもの僅に三人てふ痛快なる一面のみを記憶してその擧國一致の努力を輕視し、且國防の完からざる國家の悲慘なる戰敗の實情に思ひ到らざるは甚だ遺憾である。

文永の役（第一回の來襲）には皇國の國防施設全からず爲に對馬壹岐が全滅的慘狀を呈したのは勿論、内地も遠く水城迄も侵入せられた。而も蒙古兵の殘虐なる、歐洲を征服した時は被征服民の耳と鼻とを斬り取り樽に詰めて本國に送り戰勝のしるしとしたと傳へられてゐるが、日本に於ても或は婦女を辱め、その掌に穴を穿ち繩を通して珠數つなぎとし、或は生肝を食つたりなどしてゐる。

然るに弘安の役に於ては海岸に石壘を築き、諸國に動員して精兵を集め、二十萬の精鋭宗像より平戸に至る迄を守備し、悉く石壘によつて敵を擊攘したので敵艦海上に漂ふ事七十餘日、疫病流行士氣沮喪、遂に伊勢の神風に全滅するに到つたのである。こゝに國防の充實が如何に必要であるかを覺る事が出來る。

○

次に大切な事は擧國一致である。

上には　龜山上皇後宇多天皇至尊の御身を以て或は勅使を　伊勢皇大神宮に遣し身を以て國難に代らんと祈誓し給ひ或は岩清水八幡宮に詣で給ひ精禱一夜、從臣をして神樂を奏せしめ給ふ。

全國の神社佛閣に於ては、その神道たると佛教たると、宗派の相違を忘れて唯一心に敵國降伏、神洲の安泰を祈願し老幼男女の別ちが無かつた。

こゝに天地の神明その至誠に感動ましまし、皇太神宮の攝社風の神の祠は自ら開いて一道の神光天地に照耀するの奇瑞あり、岩清水八幡に於ては雲中に白羽の鳴矢あり、西天に向つて飛ぶの神蹟が現はれて居る。その他神明帳に載せたる全國三千一百餘社は勿論小さき社に至る迄御戸の開かぬはなかつたと傳へられてゐる。

かくて大颶風起り西海最も激烈、賊艦覆沒生きて還るもの僅に三人。これより元は遂に日本を窺ふ事を斷念した。

○

今や列强の皇國を窺ふこと元にまさり、陸海空の軍備を充實するは勿論、更に政略により、外交により、經濟、思想によりあらゆる戰略戰術を盡し相率て迫り來る。その危險や元寇に數十倍するものあり、加ふるに國内に、この外敵と相通じて國を亡ぼさんとする日本人の皮を着たる敵人が多數に潛んでゐる。

國防の充實、更に皇道精神の發揚（精神國防の充實）によつて元寇に百倍する政治、外交、思想、經濟等の大國難に赫々たる勝利を得なければならぬ。

7　大國難を大國福への道

燒津の神劍・神火・神風

皇典『古事記』は神典であり神書である。大教訓書であり大豫言書である。これ天武天皇が、その編纂に當り『斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基』と詔し給へる所以である。

國史を單なる記錄と解するものは凡庸であり、之を活教訓と覺り之を大經典として心讀するものは賢哲である。

古事記を一片の記錄と解し甚だしきは神話或はお伽話と解するは大なる不敬である。

日本武尊の燒津（一說に相模の小野）に於ける遭難と之が克服には何人も克く之を知る所であるから、その說明は省略し、之を現代に對照して皇國民お互の行くべき道の指針を學ぶ事としやう。

賊は尊の、到底力を以て敵し難きを知つて荒ぶる神を退治されん事を請うて（一說に鹿狩に野原へ）誘ひ出し欺し討ちにして四方から火をつけて燒き亡ぼさんと謀つた。

日本が力を以ては倒し難きを知つた列强の策士等は之を世界平和を紊る者を膺懲する爲と稱し（世界覇權の逐鹿場裡たる）野原卽ち國際場裡に誘ひ出し、欺し討ちに四方より攻擊の火の手を揚げて之を燒き亡ぼさんと迫り來る。これ日本武尊は四方八方より炎々と燃え迫る野火の中に孤立しその危難は全く焦眉の急であつた。若し身邊の草に燃え移らんか、只死あるのみ。尊は先づ身邊の草を神劍によつて薙拂ひ身の安全を計り以て對敵の地歩を固め給うた。

歐洲大戰後、殊に滿洲事變以來、日本を包む猛火は日本武尊のそれの如く、炎々と燃え迫つてゐる。經濟國難（燃え立つ赤字の國難と世界到る所日本品の排斥壓迫）、思想國難（赤化の火の手であつて、神・君・國を無視し神洲日本の光輝ある國體を燒き亡ぼす地獄の劫火）、政治國難（經濟・思想よりする內治の苦難に加ふるに列强の壓迫と策謀により外交難）は其の應酬に遑なく、遂にその趨く所武力戰を誘致して兵火の大國難は爆發せんとしてゐる。

殊に厭ふべきは日本武尊御身邊の草の如く赤化の火に共鳴して神洲日本を燒かんとするの醜類（醜草）である。更に一身一家一黨の利慾の爲め神・君・國・民を顧みざる醜類（醜草）である。外より迫る大國難を克服せんが爲めには先づこれ等國を危うする醜草を神劍卽ち日本精神の發揚によつて薙ぎ拂ひ靡き伏せ以て國の內を堅めねばならぬ。

神劍は日本魂の象徵であり、由來我國では人民を靑人草と稱へる。惡思想にかぶれたる人草卽ち醜草を皇道精神日本精神に歸服せしむる事が神劍によつて醜草を薙ぐの謂である。

日本武尊は薙ぎ拂はれた醜草を積み、之に伊勢の叔母君倭姬命より頂かれた火打袋から神の火を切り出して之に點じ給ふた。そこに伊勢の神風吹き起つて、火の手は逆に四方の賊に向つて荒れ狂ひ、遂にその悉くを克服された。

火は日であり靈であり神であり精神である。人草を一團となし之に　天祖大照皇大神より傳來する皇道精神の靈

火を點ずる所、忠誠無比の皇國民となる。そこに天佑神助伊勢の神風は吹き起り受働の立場は忽ち能働の立場と變り日本精神の高揚、皇道の世界的宣布、人類愛善の世界的普及、產業・貿易の進展、國防の充實、國威の宣揚となつて寄せ來る大國難の劫火を拂ひ、世界を克服して此に神の聖火を點じ、日本並に世界の大國福を招來し地上神國を成就するに至る。

○

更にお互の心の中には日本魂によつて薙ぎ拂はねばならない醜草がはびこつては居ないか。利己、自愛、姑息、偷安等々。之を綺麗さつぱりと切り拂つて大君の御爲、お國の爲、世界の爲に働かねばならぬ。此して心中の惡念を去り敬神尊皇の至誠を以て科學的施設の最善を盡す時、天佑神助至つて必ずや日本を包む劫火を打消し、あらゆる國難を克服して愛國の實を擧げる事が出來るのである。

三、肇國の大精神

1 皇國の大使命

日本と世界の比較對照地圖

皇典古事記によれば大地漸く成つて未だ固まらざる時、天津神は伊邪那岐伊邪那美の二柱の神に『**是の漂へる地を修理固成せ**』と勅し給うた。茲に二神は天の沼矛を以て水陸を分ち、をのころ島を始め多數の島を造り固め給うたのである。

○

然るに現在地上の國土を見るに其れが神によつて作られた事を首肯せらるべき生きたる證據が歴然として存してゐる。

我が九州はアフリカに、北海道は北米に、臺灣は南米に、四國は濠州に、本州は歐亞大陸に、而も水流、山脈、島嶼、半島等々仔細に點檢する時は一二の例外を除き殆ど相似の姿をなしてゐる。(天津金木によつて日本と世界とを比較すれば似たるにあらずして全く同一であるといはれてゐる。)

日本が世界の雛形である事はそれのみではない。氣候もこの狹い國で寒溫熱の三帶を有し、產物も博物學によつて

分類さるゝ綱目の主なるものは一通り產する。更に文明は東西兩洋の粹を集め、宗教は儒教道教佛教基督教を聚めて之をその發祥地以上に光あらしめ、各教は恰も故鄉に歸つた如き落ちつきを見せてゐる。

此く觀じ來る時日本と世界との關係は全く頭と全身との關係である。全身の中樞は頭に收められてゐる事は萬人の知る所であるが、右手の中樞なるものは頭の中の右手であり、呼吸中樞なるものは頭の中の肺臟である。之を國土の上に於て比較する時、全身(世界)の中の北アメリカは頭腦(日本)の中の北海道である譯であり、その他の凡てが此の筆法で相應してゐる。——コロンブスはアメリカを發見したが、これとても有るものを見つけたに過ぎない。而も大發見たるを失はない。

日本と世界の相似相應も亦世界の大發見といふべきである。

之を要するに日本を大きくして大地の上に配列したのが全世界であり、全世界を縮少し結晶して中央に置き並べたのが皇國日本である。而して其の間に頭腦と全身の相應を現してゐる。

凡て物には中心(中樞)ありて之を統一してゐる。かくて形體と組織を保ち個性を發揮し進化し完成に向ふ。

地上の國土に於ても中心中樞の必要がある。それが皇國である。皇は統るの意を有し、皇御國は萬國を統る御國である。

故に主神の顯現なる　天照皇大神がその代表者たる地上の統率者として　瓊々杵尊を日本皇國に降し給うたのである。之を人體に譬ふるに、全身を支配する靈魂はその中樞を全身の中樞たる頭に置く。これあたまの稱ある所以である。頭はありたま(有靈)又はあれたま(現靈)の略稱であつて

世界全體を支配し給ふべき地上の靈魂に相當する天孫が、世界の頭日本に降臨し給ふは當然の事である。

皇國は此くの如く世界の頭腦となるべき國であつて　皇祖の神によつて最初より此の計畫のもとに造られたものである。

世界の頭腦たる皇國に生れたる皇國民は腦細胞に相當する世界最優秀の民族である。故にこの皇國の大使命と皇國民の天職とを覺つて世界の頭、世界の指導者として恥しからぬ言心行を慎み德を養ひ、以て世界に範を垂る事が皇國民の大責任である。

2　漂へる地球

天津神の神勅

天津神の神勅によつて諸冊二神が漂へる地球を修理固成し給ふた事は既に述べた。然るに現實の國土(くに)は修理固成されたが、世界は今尚たゞよへるくにである。日本もその通りである。

試みに思へ!!　日本並に世界の、政界、思想、宗教、教育、經濟界を!!　その悉くが動搖常なき「たゞよへるくに」ではないか。この漂へる世界、漂へる日本を修理固成して、萬民和樂、恒久平和のくにとなすは、これ天津神の神勅を奉ずる眞正皇國民、天津神の直系を奉ずる皇國民の大使命でなくて何であらう。

神は永遠に生き給ふ。神勅は太古に發せられたるも之が實現の責任は現代に存續する。

○

嘗て東洋の禍根――漂へる國朝鮮は日本によつて修理固成されて今日に及び、次で東洋禍亂の根源地たゞよへるくに滿洲は皇國の力添によつて修理固成されて現在の興隆を來した。更に現代に於ける最大なる東洋禍亂の震源地、大いに漂へる國支那は各國の策動によつて益ゝ漂よひ常に世界の平和を脅かしつゝある。この漂よへる國を赤誠を推して修理固成する事は正に皇國の責任である。

修理固成を先づ日本の小圓より、東洋の中圓に及ぼし、更に亞細亞の大圓に及ぼし、遂に全世界の最大圓に及ぼして以てその修理固成なる恆久平和の確立を爲す事が、皇國肇國の大精神であつて、その間何等侵略的野心の有らう筈はない。

この大精神を國民悉くが身に體して、列强の策動、聯盟の遠吠に動ずる事なく、肇國の大理想を顧乎として實現せねばならぬ。

3　天孫降臨

天壤無窮の神勅

『豐葦原の千五百秋の瑞穗の國はこれ吾が子孫の王とますべき地なり。爾皇孫就て治せ、さきくませ、寶祚の隆えまさんこと天壤と共に窮なかるべし』これ　天祖天照皇大御神が　皇孫瓊々杵命に地上の主權を授け給ひ皇位

の繁榮を誓約し給ひし神勅である。爾來萬世一系なる寶祚の隆昌は天壤無窮、今日に至る迄寸毫の差なく實現し而も今や天運循環皇國の世界統一の機は刻々に迫りつゝある。即ち世界の主權を目指したる白人の人造的文化は今や自壞作用を起して崩壞に瀕し、皇國にして皇道に立脚してその國體の神聖を堅持し發揚せしめなば期せずして　天祖の神勅を世界的に實現し得る事の空想ならざるを知ると共に、崩壞し行く歐米の後塵を拜し覆轍を履まば必ず衰亡あるを覺り得るに至つた。

而してこの神勅に於て最も留意すべきは

豐葦原の瑞穗の國が萬有の生成化育すること葦の繁るが如き全地球全世界であり、その中津國卽ち中樞腦國が日本であり、根別の國卽ち根本國が日本である。——宇宙の主神　天之御中主大神の極德の、最も圓滿に顯現し給ひし天照皇大御神がその直系の皇孫に對し現在の日本より更に小なる日本を授け給ふ理由はない。——日本が明治初年の日本の版圖を天祖より授けられたとすれば、之を以てしては　皇位が天壤と與に窮まりなき事は國防の見地より見るも將來に於て絶對に得られない。而も當時既に　天照皇大御神の御弟神素盞嗚尊は朝鮮滿蒙に經綸を進め給ひし事より推し量るも、天孫に小日本のみの主權を授け給ふの理由は斷じて無い。（延喜式祝詞參照）

天孫は之を世界の中樞頭腦たる日本に降し、頭腦が全身を支配すると同理により世界全體を支配せしめんが爲體軀原の中津國に降させ給ふたのである。

天孫無窮の神勅こそは實に天津日嗣天皇世界君臨の大詔であるのだ。諸再二神先づたゞよへる地球をつくりかため給ひ　天照皇大御神に至つて地上の主權者をその直系の神裔と定め給うたのである。世界恆久平和の確立の核心をなし給ふ　天津日嗣天皇の世界君臨こそは皇國の大精神の主體をなすものである。

この神の立て給ひし君主、天立君主の足場となり又手となり足となつて全世界の救濟に最善を盡すことが皇國と皇國民の大使命なるを覺悟し、**世界の最强國たる小成に安んぜず、大活動大發展を覺悟して先づ眼前の非常時局を打開するの要がある。**——この現在の國難は日本の世界統一に對する一大試練たるに外ならない。喜ぶべき國難、光榮ある辛苦試驗であるのだ。

4　日を負うて進む天軍

日・神　意・皇　道

神武天皇浪速より進み白肩（枚方）の津に上陸し膽駒山を越えて大利に入らんとし給ひ、孔舍衞坂に長髓彥と戰うて皇軍利あらず皇兄五瀨命は流矢に傷き給うた。　天皇卽ち省給ひ『**我れは日の神の御子であるのに日に向つて虜を征つのは神の道に反してゐる。天神地祇を敬祭し、日の神の威を背に負うて進まば、及に血ぬらずして虜は必ず自ら敗れるであらう**』と。卽ち兵を轉じて紀州の熊野浦に出で、大和に入つて大勝を博し給うた。

その途次熊野では高倉下に神劍の降下あつて皇軍は危機を救はれ、次いで嶮難の地を進まるゝに際しては八咫烏の嚮導あり、最後の長髓彥との決戰に際しては金鵄の瑞祥があつて、光輝燦然賊軍爲に眼眩み敗走或は歸順するに至つた。

日を負うて進むことは神軍の兵法の奥義である。

之を現實的に見る時、曩太陽が山崎の決戰に於て大勝を博したのも日を負うて進んだのが與つて大いに力がある。東郷提督も日本海大海戰に於て、常に、日を負うて進まれた。此くする事によつて敵は終始不利の狀況へ〳〵と追ひ込まれて行つた。又飛行機による敵陣或は敵軍の爆擊の如きも、日を背に負う事は敵の視察を妨げ、若し空中滑走により爆音を消して急襲する時は、高射砲ありと雖も殆んど之に對應する遑なく大成功を博するものである。

更に重大なるものはその精神的の意義である。その徹底的說明は短文の能く爲し得る所でないからその片鱗を示す事とする。

一、日は　天照皇大神を現はす

天照皇大神は一名日の大神とも申し上げ、萬神統御の皇大神にまします。――そのみいづは太陽の如く照々として輝き給ひ、一切の萬有に、又一切の神と人とに、愛の熱と眞理の光を與へて、之を導き之を救ひ、之を養ひ之を活かし給ふ。――この大神の御心は　皇祖皇宗の御聖訓となつて今日に流へられ、之を皇道といひ又惟神の大道といふ。

日を負うて進むは卽ち皇道によつて進むの謂である。一切の謬れる外來の邪惡分子を捨て、一切の正しき外來の文化を皇道によつて活用し、國を擧げて堂々と進めば、日本を包圍する世界聯合の大軍と雖も、之に勝たん事火を睹るよりも明である。

神は正義を助けて地上を守らしめ給ふ。故に天地の公道、人倫の常經にして皇大神の神意そのまゝの道皇道を實行する神の軍卽ち皇軍の百戰百勝するは明々白々の理である。

二、日は卽ち　天津日嗣の日の御子にまします。

地上の　天照皇大神として、世界萬國を安國と平けく治め給ふべき至尊至貴の天立君主――地上の皇大君――百王統御の君――天に一日地に一君の神立君主は　日本天皇にましますのである。

ユダヤの碩學アインスタインは言つてゐる。

『世界は益々進みに進み爭ひは繰返されるであらう。かくて戰ひに疲れ果てた人類は眞の平和を求めて世界の盟主を推すであらう。而して世界最古にして最も貴き家柄がその盟主たるべきものである』

と　日本天皇が將來世界の盟主にましますべき事を言明してゐる。――外人すら然り。我等はこの　至尊至貴の大君を奉じてあく迄世界平和の確立に邁進すべきである。

三、我等の皇國日本は皇御國卽ち萬邦統治の國、大統一の太陽國である。この皇國の大使命を負うて起ち、世界萬國を指導するこそ、我等皇國民――すめらみくにのたみ――の使命であるのだ。

我等は日を負うて進む天軍――神軍の自覺を明かにしその使命を果す爲、日章旗を捧げて進むものである。

日章こそは神聖無比の聖章である。

日は萬神統御の神　天照皇大神を象徵し、百王統御の君　天津日嗣天皇を象徵し、萬邦統治の國、大日本皇國を象徵し、更に日本魂、盡忠報國の赤誠、擧國一體、億兆一心世々厥の美を濟す國體の精華を具現したる神聖なる聖章である。

この聖章たる日章旗を捧げ、この聖章に內在する道義心卽ち皇道を主體として動く時、內に擧國一心一體の實を擧

げ得て萬民和樂國家興隆の礎を固め、外、侮を招き或は侵略を受くるの虞隙を與へる事なく、萬邦をして皇國の道義を慕ひその神武に服ひ、やがて來るべき皇國の道義的世界君臨の準備工作は茲にその大盤石の基礎を確立するであらう。

皇道の旗幟・日章旗の尊嚴に就ては別に章を設けて詳說する事とする。

5 六合一都

神武天皇奠都の詔

『富士・古文書』によれば　鵜萱葺不合尊は五十一代ましまし、その第一代の御代に於て、以前から屢々西の大陸より我九州に來り寇せる大軍を鎭定しつゝ日本を治めんが爲、都を本州より九州に遷させ給へる旨が記されてゐる。

茲に　神武天皇は今より二千六百年前日向を發し給ひ(昭和九年よりいふ)六年の後即ち二千五百九十四年前大和に還らせ給ひ、中津國を鎭定して奠都の大詔を發し給ひ、その　天祖大神より受け給ひし肇國の大精神を明確に表明し給うた。

『上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘むべし。然して後六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて而して宇と爲むこと亦可からずや』

六合は天地と四方をいひ全世界を意味し、八紘は東西南北乾坤巽艮八方の荒れたる地の果を意味し、之を掩ふは全

世界を掩ふの意である。即ち詔勅の主眼は　天祖と皇孫の大御心を心とし世界を統一して、天下を一家(一宇)とし、これに一都を設けて政令悉く一途に出づる至治太平の地上天國――地上を打つて一丸とする和氣靄々の大家族たらしめんとせらるゝにあるのだ。

神武天皇以前の日本文化を極めて未開の如く解するもの多さも、最近に於て發見せられたる古記事以前の信頼すべき古記錄によればその發展極めて驚くべきものあり、日本が全世界を統治し居りたる多數の史蹟に滿たされてゐる。而もこれと同時に文化の殆ど壞滅を來す如き大地の大變動數次に及べる事をも明記してゐる。そして　神武天皇の御曾祖父君並に御父君の御代にも大地變のあつた事を記されてゐる。

故に右の詔勅は日本書紀に記す所で、穴居等文化の程度甚低き如く漢文體にて綴られあるも、大地變後の生活低下と見るべく、古代の文化は大したもので、從つてこの詔勅は　天祖大神以來の大理想を述べられたるもの、決して未開時代の單なる空想的希望ではないのである。

6 明治天皇御宸翰 (日繪四參照)

明治元年國民に賜はりたる御宸翰の全文を拜讀し奉るの時　明治天皇の宇宙の主神そのまゝ　天照皇大御神そのまゝなる廣大無邊にして仁慈無限の大御心を拜し奉り感涙の自ら頰を傳うて降るもの屢々である。

殊に『天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕の罪なれば今日の事朕自ら身骨を勞し心志を苦しめ、艱難の先に立ち古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし』に至つては

皇國の臣民たるもの誰か感泣せざらんや。――國民の上下老若男女悉くこの大御心を體してその職務に勵精せば皇國の威烈は當に世界の光華となる事必定である。

更に『朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ列祖の御遺業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず親ら四方を經營し汝億兆を安撫し、**遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富嶽の安きに置かん事を欲す**』を拜しては、前述天津神の神勅、天壤無窮の神勅、神武奠都の詔勅に一貫する大精神を近代化して垂訓し給ひしものと拜すべく、吾肇國の大精神が終始一貫道義的世界統一即ち世界恒久平和の確立にあり、而もその世界が神と君とのみいづにより皇國を頭とし中心とする一身の如く一家の如く、整然たる秩序を保つ統一體たるべき事が根本問題となつてゐるのである。

○

我肇國の大精神は皇大神(宇宙の主なる神即ち皇室の大祖神)の御神格の**進展性**により、全地上を掩ひ盡して普天の下率土の濱皇土皇臣にあらざるなからしめ、悉くを打つて一丸として皇大神の代表者たる皇大君(日本天皇)を大家長とする一大家族たらしむるにあつて、その間一の征服侵略等殺伐にして限制的暴力を伴はざるが一大特色である。

又皇大神の御神格の**永遠性**よりして常に萬世一系天壤無窮なる實を擧げらるゝ事が今一つの大特長である。

皇國の道義的世界統一によつて始めて世界がこの群雄割據の地獄的苦悶より救はるべき事は、吾等日本人の獨りよがりではない。佛人ポール・リシャール、猶太の碩學アインスタインも口を極めて絶讃してゐる所である。後にも出て來るが參考として若干を摘錄して置く。

○予世界の爲めに救濟の道を求むる、唯夫日本固有の正義の精神に因つて統御せらるゝより外其法なきを知る。予は是が爲遙かに日本を研究すること久し。今此の國に來つて親しく古往今來を觀るに、正しく是れ天が久遠の前より世界の爲めに準備し、構築し、培養し、愛護し來れるものたることを確認せり。(大正六年)

ポール・リシャール

○建國以來一系の天皇、永遠に亘る一人の天皇を奉戴せる唯一の民よ、貴國は地上の萬國に向つて、人は皆一天の子にして天を永遠の君主とする一個の帝國を建設すべきことを敎へんが爲めに生れたり。

○萬國に優りて統一ある民よ、貴國は來るべき一切の統一に貢獻せんが爲に生れ、又貴國は戰士なれば人類の平和を促さんが爲に生れたり。

アイン・スタイン

近世日本の發達史ほど世界を驚かしたものはない。この驚異的進展！そこには他の國と相違する何ものかゞなくてはならないと思つてゐた。果せる哉三千年の歷史がそれであつた。

この永い記錄を通じて一系の天皇を戴くといふ比類のない國體を保有することが日本を今日あらしめたのであつた。

私は常に世界の中で、どこか一ケ所位日本のやうな貴い國がなくてはならないと考へてゐた。何故ならば――見よ！世界の將來は進むだけ進み、其の間！幾度か爭ひは繰り返され、最後は屹度戰ひに疲れる時が來るであらう。

その時世界の人類は必ず眞の平和を求めて世界の盟主を擧げねばならぬ時が來るであらう。斯の世界的盟主となるものは、武力や金力でなく、凡ゆる國の歴史を超越した最も古い且つ貴い家柄でなくてはならない。

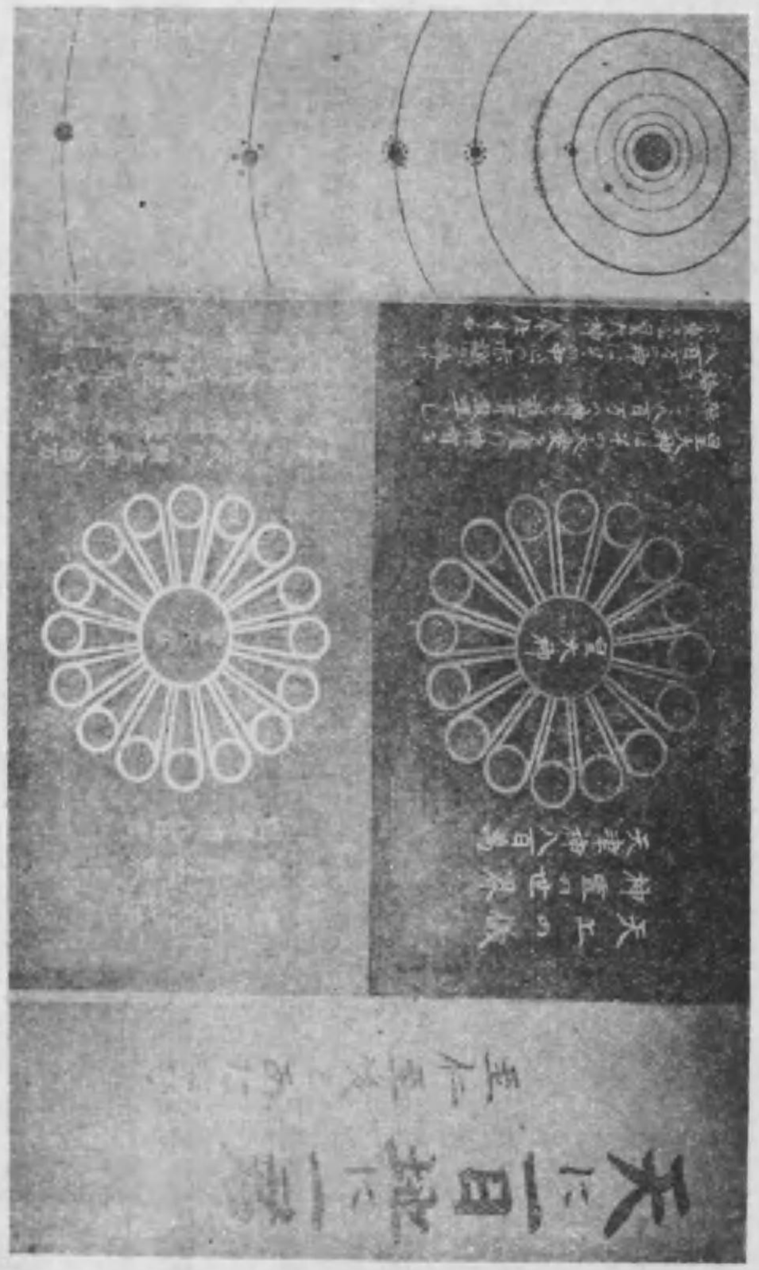
7 天に一日地に一君

至仁至愛とあなゝひ

現實世界に於て天文學の示す所に從へば、太陽系の諸遊星は太陽を中心として統一せられ、遊星にも亦衛星あつて之を中心として廻つてゐる。畢竟中心と部分とは頭と全身との如く成生の最初より神意によつて定められ結びつけられてゐる。

神靈の世界に於ても之と同樣に皇大神を中心として八百萬の神は一意あなゝひの誠をつくし皇大神は中心に位して八百萬の神に神愛の限りを盡し神智の光を與へて之を慈育愛護し給ふ。これ亦宇宙成生の最初より定れる天則である。この神靈の世界の法則卽ち

天上の儀を地に移寫し、地上の皇大神と顯現し給ふ皇大君を中心に、臣民たる八百萬の神が一意あないひの誠を盡し來つた地上唯一の神の國こそは皇國日本である。この天地合體神人合一の德により皇位は萬代不易、國家は永遠に繁榮する。



太陽系の諸天體

あないひとは己を主とせず、すべてを己の上に奉りかみ第一の精神を以て誠を盡すをいふ。

皇大君は神に等しき至仁至愛の大御心を以て國民のあないひに應じ給ひ、天下億兆一人も其所を得ざる時は大君自らの罪となし給ふ。

この至仁至愛は**遠心力**となりて萬民に光被し、このあないひの至誠は**求心力**となりて皇大君に集中し歸向する。こゝに兩々相俟つて菊の御紋章そのまゝの美しき中心歸向の國家が成立してゐる。そは王道、覇道の列國にては絶無の國體である。

十六菊の花瓣は四方八方十六方即ち一切を表し、その一切が中心の大君に奉仕する相であつて、内閣各省その他あらゆる諸機關の翼賛の誠を盡す相であり、一君萬民一如の姿である。

克く、天に一日地に一君の天地惟神の大眞理に則り、皇國の光榮の爲に活躍し、和合共同し、徒に外國の樣式を模倣して分裂抗爭を事とし國力を衰退せしむる亡國道に迷うてはならない。

四、皇國・皇位の尊嚴

1 神國に刃向ふ主權は亡ぶ

我が天壤無窮、萬世一系なる皇位の尊嚴無比にましまし『憲法』にも『天皇は神聖にして犯すべからず』と成文律にまで明示せらるゝ所以は　天皇が天立君主、即ち神の立て給ひし地上唯一の神立君主にましますからである。その詳細に就ては『肇國の大精神の部』に於て概說したが、宇宙の主神なる　皇大神は地上全世界を安國と平けく治め給はんが爲に、神の代表者としてその直系の神孫を日本神國に降臨せしめ給うた、これ即ち　瓊々杵尊にまします。

我世々の大君が皇大神の代表にましますと　皇大神即ち宇宙の主たる神が八百萬の神と共に極力　皇位を守護し給ふが故に、如何なる强敵と雖も神國に刃向ひ大君に射向ひ奉るものは必ず自ら滅亡を招くに至る。

そは、空理空論ではない。請ふ見よ!!　蒙古を、清を、露を、獨を、學良を。神國に刃向ひ皇位に弓を引きたる主權は、悉く間もなく亡びてゐる。それが一の例外もなく、それが如何に世界の最强を誇る大國であらうと必ずさうである。これは理論ではなく悉くが活事實である。

『神國に刃向ふ主權は亡ぶ』これ萬古動かすべからざる神誓神約(神の約束)であつて『天壤無窮の御神勅』の尊貴を力强く裏書するものに外ならない。

現在日本に双向ふ主權も亦少くない。その最後や思ふべく又憐むべきである。

この尊嚴なる神理を解せざる豪族、權臣、寵臣、僧侶、或は武門武士が、形を見て神靈を認めず、時に政治的に、

2 天位を覬覦する者は亡ぶ

上中央は天照皇大神を表し、神國に双向つて亡んだ主權元、張、露、獨を鮮明に、現今双向ひつゝある。

神國に双向ふものは強大なる主權と雖も忽ちにして滅亡する。況んや國内に蠢動する惡逆不逞の徒をや。

然れど　天津日嗣の日の御子にまします大君と雖も地上に顯現し給ふ時は一個の人の姿を持たせ給ふ。故にその尊貴なる御神靈を認めずその背後より守護し給ふ　皇大神と八百萬の神の大威神力を思はざる凡俗の眼には一個の人として映ずるも、その靈的内容を拜すれば顯津御神にして現人神（この世ながらの生き神）にましまします。これ　天皇の神聖にして犯すべからざる所以である。

宗教的に、將た又武力を以て皇位を覬覦せんとするものあるも必ずその目的を達し得ずして、却つて自らを亡ぼすは古今の歴史が幾多の活教訓を示す所である。

イ、大極殿の血雨

政治的反逆者――入鹿誅せらる

蘇我氏の專横は佛教による所も頗る多しと見るべきであるが、又儒教を背景とする漢人鮮人の支持による所を更に多しとする。

儒教に於ては禪讓放伐を以て德の存する所に主權が歸するもので、主權は德を追ふて轉々と移り行く。然るに皇國に於ては『**天地生え貫きの皇位**』が萬代不易である。この眞理に疎く、而も當時の日本に於ては明治維新に於ける歐米先進國と同樣の文明國として尊敬せられたる漢人朝鮮人は朝廷に優遇せられて一大勢力を爲し、蘇我氏を擁立して主權を振はしめ、自らの地位を固めんとした。この絶大なる支援を得たる蘇我氏は忽ちにして大勢力を得るに至り傍若無人の振舞を敢てした。

中大兄皇子と藤原鎌足の智謀英斷によつて、此の非望を懷ける巨魁を斃されし事は、儒教の侵略に對して鐵鎚を加へ、克く皇道を宣揚し皇位の尊嚴を恢復したる壯擧であつて、大化の改新は形體は唐制に學ぶ所少しとせざるも、その大精神に於ては『**天に一日、地に一君**』皇道精神を遺憾なく發揮せるものである。

○

歐米思潮とその政治、經濟機構に惑溺して君國の爲に忠ならず、大君の赤子たる同胞大衆の爲に愛ならず、たゞ利己と排他の爲に妄動蠢居するの存在は、速かに皇道精神に復歸せずんば、遂に蘇我氏の覆轍を履むに至るであらう。

ロ、宇佐の神勅

宗教的反逆者——道鏡の野望粉碎

皇道に於ては皇室の大祖神を以て宇宙の主神を仰ぎ、その直系の聖天子を以て天津日嗣と尊び、之を神の顯現として忠誠の限りを捧げる。

佛教に於ては卽ち然らず　天祖大神を認めず、天子と雖も佛法僧卽ち三寶の奴と見る。

佛教興隆の絕頂に達したる奈良朝の末期に於ては、天立君主の皇道精神は地を拂ひ、**佛あるを知つて神あるを知らず、法王道鏡あるを知つて天津日嗣天皇ましますを知らざるもの**多きに至つた。卽ち太宰府の主神習宜の阿曾麿、宇佐八幡の神勅と稱し『道鏡を帝位に上さば天下泰平ならむ』と奏上したるはその適例である。

勅命に從ひ清麿宇佐に至り神勅を請ひ、更に神異を示して確證を與へられん事を祈つた。大神卽ち忽然として神委を示現し給ひ、身の丈三丈に餘り光輝滿月の如し。此くて神勅を賜ふ。

『我國家開闢以來君臣の大義名分定まれり。未だ臣を以て君となし、君を以て臣と爲せし事あらず。天津日嗣は必

ず皇緒を立てよ。道鏡の悖逆本より天地容れざるの大罪なり。宜しく速かに剪除せよ。汝道鏡を怖るゝ勿れ、吾は必ず相濟けむ云々』

と。清麿還り神色自若として神勅を奏す。

道鏡怒つて清麿を汚麿と改め大隅に流す。而も途中刺客を遣して之を追殺せしめんと謀つたが大雷雨の爲に清麿はその危難から免れた。

宇佐の神勅、清麿の口を衝いて堂々公表せらる。これによつて皇道を再確認せる群臣は既に道鏡の大逆を覺る。清麿を流すも殺すも、既に輿論を如何ともするなし。道鏡の失脚、皇道精神の復興は既に神勅公表の瞬間に於て決定的動機を與へられた。

○

今や外來宗教に惑溺し天立君主と皇國と皇道とを忘れ、更に外來思想に心醉して反逆心に拍車をかけ、加ふるに外來政治、外來經濟に沒頭して君國の神聖なる傳統を覆へさんとする千萬の道鏡を見る。——その末路や神明既に之を決定し給ふを覺悟すべきである。

眞に君國に忠ならんとするの士女は、須らく自ら和氣の清麿を以て任じ、壓迫と買收と脅喝とを意に介せず、一意專心、皇道一本、臣子たるの本分を盡し、先づ皇道日本の建設に邁進すべきである。

ハ、天誅の征矢

武力的反逆者——平將門の最後

平將門は上總の國司平高望の孫で、勇敢にして武藝に長じてゐた。後京都に上り攝政藤原忠平に仕へ、檢非違使を望んで得られず、憤激遂に藤原純友と東西相應じて叛するに至つた。即ち伯父平國香を殺し、關東各地を征服し下總の猿島に僞宮を造營し、左右大臣以下文武百官を設け、自ら新皇と稱して朝廷に反した。

當時藤原氏は、その祖鎌足の忠誠を忘れて功に誇り、外戚の權を振ひ、私有地を獨占する事天下の大半に及び惡政至らざるなく、地方豪族の藤原氏に叛するは敢て咎むるに足らない。

然るに將門に至つては自ら新皇と稱し一切萬事を天子に擬ふ、皇國の臣として天地容れざる大逆を敢てせるものといふべく、遂に國香の子平貞盛と藤原秀郷に攻められ、天誅の征矢は貞盛の手によつて放たれ、その首は近江田上山の蚣蚣退治で有名な俵藤太秀郷に擧げられ、反逆の生涯に止めを刺された。

○

天立君主は神勅の具現する神武を保有し給ふ。故に一介の武將の有する人の勇の如き、たとひ拔山蓋世の勇ありと雖も正に龍車に向ふ螳螂の斧に過ぎない。然るに心驕れば野郎尊大遂に不軌を謀つて自らの墓穴を掘る。昭和の聖代當に三省すべきは、武人も政治家も富豪も學者も、神を忘れ　天皇を忘れて慢神の罪を犯さば、天誅の征矢は何れよりか飛び來つて其の頸部を射貫くであらう事である。

五、思　想　戰

1　八岐の大蛇

神代の昔八岐の大蛇なるものが可憐の八人乙女を七人迄呑み終り、最後の櫛稻出姫を呑まんと襲ひ來る所を素盞嗚尊の神勇と神智によつて寸斷せられ姫が危難を脫した事は皇典古事記の示す所である。

皇典古事記は既に述ぶる所の如く神書であり教訓書であり大豫言書である。越の八岐大蛇は之を現代に比較せば外來の惡思想であり、皇國を毒する惡思想の根源は、次に述ぶるフリー・メーソン（ユダヤ人を主腦とする世界覆滅を目指す一大祕密結社）であつて、既に九分九厘迄世界を自由に動かしてゐるもの）である。

古事記の本文に示す神代の八岐大蛇と、昭和の八岐大蛇即ちフリー・メーソンとを比較對照すれば全く符節を合するものがある。

神代の八岐大蛇

一目は赤加賀知（註　ほほづき）なして

二身一つに頭八つ尾八つあり。

昭和の八岐大蛇

一その目的、目標、眼目とする所は世界赤化にある。

二本體は一つであるが世界覆滅の陰謀に參加して居る

のもろたし蛟比と禍思惡の代現き描を蛇大の岐八に、ますに記事古典皇

三其身に苔及び檜すぎ生ひ

四其長さ、谿八谷、峡八尾を渡りて

五其の腹を見れば、悉に常も血爛れたり。

又此の惡魔を寸斷せらるゝ素盞嗚尊は皇道精神日本精神の權化であり、この大精神によつてこそ惡思想は寸斷し得るのである。

又之を國際的に見る時は、素盞嗚尊は日本皇國であり、八オトメは弱小國であり、その多くは八岐大蛇に等しき貪慾殘虐なる白人に呑まれ、今や極めて少數が將に呑まれんとしてゐる。滿洲國といひ、支那といひ、シヤムといひペルシヤ、アフガニスタンといひ、若し素盞嗚尊日本にして之を救はずんば彼れ大蛇に呑み盡くされるであらう。

ものは、列強に内在する多數の頭目と多數の配下がある。

三檜(上流)杉(中流)苔(下流)の各階級がその陰謀に乘せられて動搖不安の生活を送つてゐる。

四地球上の各國はこの惡思想に山の奥、水の末迄暴されてゐる。

五表には自由平等友愛等の羊頭をかゝげてゐるが、この大蛇の腹即ち動く所は革命、戰爭、爭議等常に流血の慘を見ざるはない。

2 フリー・メーソンの世界征略運動

昭和の八岐大蛇の本體がフリーメーソンである事は既に述べた所である。日本が國際的に孤立させられて居るのも支那の排日を激化するものも、共產黨の背後の勢力も、思想の惡化も、さては經濟戰や政略戰の操縱も國際聯盟の創始者も悉くこのフリー・メーソン結社であると言へる。

世界の列强が手を携へて日本包圍陣を形作つてゐるのは正に各國内に潛在する彼フリー・メーソンの現れであり、彼等の稱する**神秘の蛇輪**であり、米露の握手はこの蛇輪をして完結せしめ了つた。而して上古ユダヤの聖賢は『**象徵の蛇**』なる策略を立てゝ各國を征略せんとした。自らを蛇となし各國の心臟部を貫いて思想を惡化し道德を頹廢せしめ經濟界を撹亂し遂に革命を起し之を倒して世界を一巡するのである。

この蛇輪の徹底的完成の妨げをなすものが日本であり滿洲國の誕生である。之に對して聯盟並に米露が極力反噬し來るは當然である。

日本の大國難の正體はフリー・メーソンに歸着する。吾人は素盞嗚尊に神習つて昭和の八岐の大蛇を寸斷し、天津日嗣天皇に彼等が併呑せる世界の統治權たる神劍を奪返して奉らねばならない。

今試みに彼の世界並に皇國に對する作戰を一覽して見やう。そして靜かに世界並に日本の實情を顧みやう。而してその作戰が悉く實現して居るのを覺る時竦然として肯に栗するを覺えるであらう。而も尙ほ之を疑ふ人々の爲に一言して置く。――この大陰謀を明治二十五年以來『**惡神の經綸**』として警告暴露し之が對策を明示し給へる『**正神の經綸**』の地場が皇國日本である事を。

フリー・メーソンの一般方略

一、世界に於ける經濟的勢力及び主權を遂次掌握すること。
二、現在の秩序を打破し輿論をして吾人の希望する方向に指導せしめ、其の武器として印刷及び教育機關を掌握すること。
三、現在の國家組織特に君主制を破壞すること。
四、猶太教以外一切の宗教を打破すること。
五、非猶太人を放恣ならしめ其贅澤慾を加長せしむること。
六、非猶太人青年の意志を薄弱ならしめ其の智能を錯亂せしむること。
七、國民性及び愛國心を麻痺せしめ之を輕侮せしめて國家觀念を打破し、以て世界的猶太國樹立の準備をなすこと。
八、階級戰を助成して勞働階級に反抗心を向上せしむること。
九、無智にして最大多數者なる勞働階級の手に主權を醵弄せしむるため普選を促成せしむること。

日本に對する方略

一、國民の思想、生活狀態及び習慣を歐米化して國風を打破すること。
二、言論機關と政黨とを通じて民衆及び勞働者の代表權を擴張し以て主權を崩さんとすること。

三、階級闘爭を助長せしむる爲歐洲に於けるが如く極東に資本主義を發達せしめ次で總瓦解を誘起せしむること。
四、新稅及び增稅等により國民と政府及び主權との間に軋轢を起さしめ、以て政治的革命氣分を增長せしむること。
五、國防費を擴張し富力を衰退せしむること。

2 鷸蚌の爭（漁夫の利）

覺めよ國民!! 覺れよ陰謀!!

春の暖かい正午の頃、蚌がウト〳〵と午寢をしてゐた。よき獲物ござんなれと一匹の鷸がいきなり蚌の肉をツヽイた。春の甘い夢を破られて吃驚仰天した蚌は反射作用的に肉をスッ込めて蓋を閉ぢたから鷸は嘴をはさまれて了つた。

鷸は蚌に對して『今日も雨降らず明日も雨が降らねばお前は死んで終ふのだ、早くおれの嘴を放さぬか』と脅喝すると、蚌も負けては居ない。『今日も餌を食はず明日も食はねばお前は死んで終ふから、おれがスッカリ食つて了つてやる』と應酬する。兩々相譲らず爭つてゐる所を、今しも通りかゝつた漁夫が二つとも捕へて了つた。

二者相爭ふ事は第三者の乘ずる所となるを誡めて、鷸蚌の爭ひは漁夫の利となるといひ、或は兩者を相爭はしめて第三者が互利を占めるを漁夫の利を占めるといふ。

股鑑遠からず夏后の世にあり。近代に於て漁夫の利を飽喫したるはユダヤのフリー・メーソン結社であり、最も苦

杯を嘗めたものはロシヤである。

愚直なロシアの農民、勞働者、兵卒はフリー・メーソンの手先である共產黨から煽動せられ、皇帝・貴族・富豪（資本家）、地主を天地容れざる仇敵と觀じ、又彼等を倒す事によつて廣大なる土地、豐富なる物資、宏壯なる建築物はわれ等のものになると信じて彼等を倒した。

然るに其の利得として享けたるものは自由でもなく平等でもなく且幸福でもなかつた。

見よ！　ロシアの政權はフリー・メーソン卽ちユダヤ人によつて完全に掌握せられたではないか。革命成功の後政府要路者五四五名中純粹のロシア人は僅に三十一名に過ぎず、四四七名はユダヤ人であり、殘る六十七名はドイツ、ポーランド、チエコ・スロバキヤ等の外國人であつた。そして帝政時代よりも更に嚴重な暴力の桎梏に壓せられ、最近の情報を見るもウクライナ（南露）に於ては二千萬の飢に泣く者を出すの暴政下に呻吟してゐる。

○

政爭といひ、階級鬪爭（勞働爭議、小作爭議）といひ、軍民分離運動、反戰運動、敗戰主義等は、國內に醜蚌の爭ひを行はしめて漁夫の利を占めんとするフリー・メーソン一派の策戰に出でゝゐる。

日支を爭はしむる事も彼等が東洋に於て漁夫の利を占むる爲の經綸である。

我國は古來億兆一心世々厭の美を濟すを以て國體の精華としてゐる。一君萬民、君民一體、上下一致、中心歸向の萬邦無比の善美なる國柄である。

皇國の力を弱むる爲の此等策動に乘ぜらるゝ事なく、擧國一致、國民皆兵、軍民一體の實を擧げ、以て世界萬國に

神聖なる天立君主國の範を示し、**彼等をして反逆の矛を伏せて東方よりの光を仰ぎその德化に歸服する如く**我等は皇國民としての最善を盡さねばならない。

外よりは手もつけられぬ要害も
中より破る栗のいがかな

六、經濟戰

1 經濟戰今酣なり

世界に雄飛する日本商品

日本人は戰爭には強いが商工業や發明などは到底歐米人には及ばない位に日本人自身も考へてゐた。然るに現在では日本人の持つ素質、それは少くも二千年の間全世界の長所美點の悉くを吸收して自らを修養し練磨し、加ふるに天孫民族として世界の腦細胞民族としての優秀性を大成したので今や右に天下無敵の艦隊を提げ、左に天下無敵の陸軍を提げてゐると同樣、經濟戰に於ても天下無敵の大戰艦を組織して世界の市場を風靡し、日本魂の眞價を有ゆる製品の上に體現して、優良にして低廉、それがメイド・イン・ジャパン(日本製)の代名詞と化するに至つた。

○

『日本は小さな獅に國際聯盟脫退など威張りくさつて、小なまいきな奴だ、經濟上で少し壓迫してやれば直ギヤフンと參つて了ふであらう』これが當時歐米各國が日本を見た眼であつた。

所が事實は反對に、我が日本商品は折柄の圓爲替安の順風に乘つて燎原の火の如く世界市場に突擊を開始した。例へば昭和八年度**アメリカ**の輸入する生糸の九〇%は日本品であり、**印度**の輸入する人絹の九九%メリヤスの九一%が

又日本品である。**蘭領印度**の綿布の如き七五%であるが、昭和八年の暮には九九%に上つてゐる。——こんな風であるから、日英、日印、日蘭會商が矢つぎ早に起つて、關稅を引揚げろ、日本品の輸入を制限しろと足許へ火がつくやうに騷ぎ廻るのも無理はない。

事實聯盟脫退には敢て驚かなかつた各國もこれには慄へ上つた。拋つて置けば自國の市場は悉く日本品に奪はれ自國の產業は破滅の外はないからである。

○

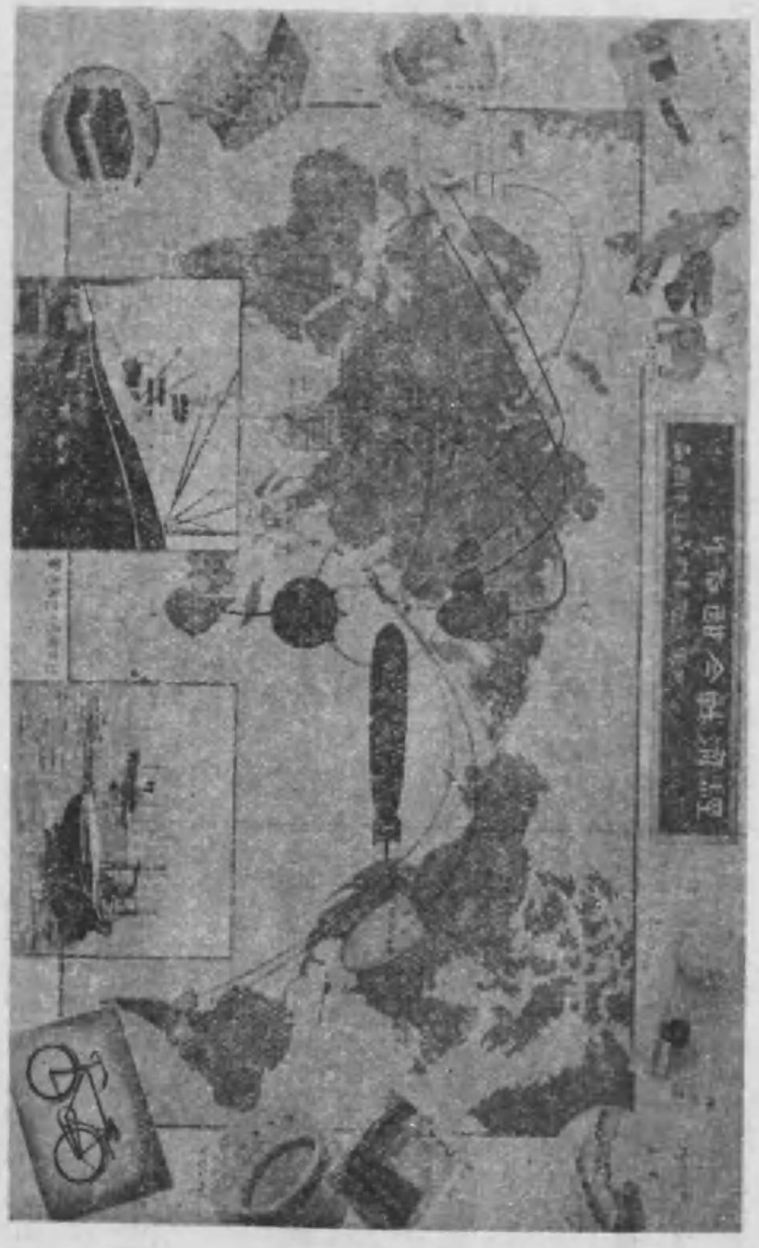
然るに爆彈三勇士を產んだ日本の商品には日本魂が籠つてゐると見えて、關稅引揚の障壁や輸入制限の鐵條網を踏み越えて、匪賊討伐の皇軍の如く敵商品を蹴散らして前進又前進、今や全く世界を風靡してしまつた。

ムツソリーニ伊太利首相は昭和九年五月廿六日伊國下院に於て

『近時日本は歐洲の疲弊を尻目に、次第に國力を伸張しつゝある。今にして歐洲が覺醒せずんば、逆に日本の勳的勢力の前に屈伏せねばならぬであらう』

と第二の黃禍論を述べ、**巴里のヴユウ誌**は、恐るべき日本の進出と題し

『日本の綿製品、人絹、雜貨の進出は勿論であるが、更に日本双物は高關稅を突破して双物の本場たる**英國**にシエフイルド双物の半値で侵入し、時計王國たる**瑞西**には日本製の懷中時計、掛時計が進出し、ボヘミヤ硝子で有名な**チエコ・スロヴアキア**には日本硝子が堂々瀾歩し、工業國たる**英米獨**に懷中電燈、電球、玩具が怒濤の如く流れ込みつゝある』



すぼらのもろな主の品商本日出輸はに國周・し裝な品入出輸て以を雷蓄・雷魚・丸彈のと黒と白

と述べ、**伊太利のイル・ソール紙**は

『フューメ、日本綿布に占領さる』

と特筆大書し、**英國のデリー・メール紙**は

『二ポンド一〇シルの自轉車、日本より侵入し、年に二萬臺は英國に輸入せられんとす』

と大聲疾呼して居る。

何れも誇張に失する樣であるが、列國が日本商品の進出に悲鳴を揚げつゝある有樣を遺憾なく述べてゐる。

○

實際**電燈の發明國アメリカ**にも日本の電球はドシ〳〵進軍して市場を占領しつゝあるが、電氣類だけではと自惚てゐる**ドイツ**のベルリン目貫の街頭に日本電球が煌々と輝くなどは全く痛快である。

英國綿業の中心地ランカシヤーあたりの紡績職工までが日本製の綿靴下やハンカチやメリヤスを安くて品がいゝからと珍重し出したのであるから英國の頭痛の程度も察せられる譯。英國が世界に誇る綿織物すら印度では三割も四割も安い特惠關稅に保護され乍らその顧客の半分を日本品に奪はれてゐるなど、日本經濟戰の捷報といはねばならぬ。

○

此の如く日本品は六大洲津々浦々に至る迄制覇の戰線を擴大し盛に捷報を齎してゐる。之に對して各國は益〻壓迫の手を加へつゝあるから愈〻奮鬪最後の勝利を獲得せねばならない。これが爲には經濟戰に從ふ人々に、勇士が彈雨

の下に戦ふと同様、私利私慾を離れた純忠愛國の皇道精神の發揚を切望する。

2　平時は金、戰時は人・物

平時に於ては金力があらゆる物品を引寄せる。如何に仲の惡い國からでも金貨さへ出せば、米國の木材、棉花、鋼鐵、濠洲の羊毛、印度の棉花、銑鐵、ドイツ、英國の鋼、支那の銑鐵、ロシアの石油、何でもお好み次第に引寄せる事が出來る。

所が戰時になれば樣子が違つて來る。殊に日本對世界戰といふやうな大戰になると金貨の山を積んでも敵國からは何一つ買ひ取る事が出來ない樣になる事を覺悟しなければならない。

平時に於ては十圓金貨は畧四斗俵に對し得るが、戰時になると金貨の山を積んでも握り飯一つの價値さへない事も出來

る。

金がなければ戰爭が出來ないと考へる事は迷信である。日本は好んで戰爭をする國ではないが險惡なる國際情勢より推して列强の連合による强壓力を以て非道の要求を强られるが如き事なきを保せない。此の如き場合に於て金なきの故を以て泣き寢入する事は自ら亡びの穴を掘るものである。

あの列國に周圍を取りまかれたドイツすら、歐洲大戰直前には僅々三億圓の金しかなかつたが、克く七百億圓の軍資を支出してゐるではないか。ドイツの苦しんだのは金の不足ではなくて物の不足であつた。

吾等は金の力を過信してはならない。『平時は金』『戰時は人・物』を標語として經濟を運用せねばならぬ。平時に於ても人の必要な事は勿論であるが戰時は一層その必要を痛感する。一枚の金貨はなくとも農業、漁業、鑛業等によつて資源を培養開發し、工場、職工の總動員によつて軍需品をどし〳〵と製作する。擧國一致、軍民一體、第二線にあ

るものは兵器彈藥糧食を潤澤に提供し、その推進力によつて第一線にあるものは奮戰力闘する。かくして海正面の守りも陸正面の護りも大盤石となる。更に盟邦滿洲帝國との提携を益〻密にし、資源の開發、產業の振興、軍需工業の進展等を遺憾なからしめ、殊に一切を動かすエネルギーである人の和を全うする事に全力を擧げねばならぬ。

七、農は天下の大本

1 聖主と名將

明治天皇とグラント將軍

明治十二年八月元米國大統領グラント將軍來朝し　明治天皇に拜謁し、去るに臨んで赤誠を披瀝してその所懷を書輸を以て進言し奉つた。拜謁の光景は明治神宮繪畫館の壁畫によつて偲ぶべく、左に將軍進言の一節を述べる事とする。

『嗚呼盛なる哉大日本天皇陛下　祖宗の鴻業を嗣がせられ皇統連綿として二千五百數十年を經たり、德澤の人心に浹治(註あまねきこと)たる何ぞ其の久しきやゝ　グラント自國にあり既に是を聞き、今や來りて始めて其實を目擊し以て國體の所以を知る。殊に大嘗典の如き宇內の絕美と稱すべし。

天皇自ら耕して新穀を穫り　皇后は自ら蠶して神衣を製し以て祖宗に奉り、且つ自ら稼穡(註植付と收穫)の艱難を試み給ふ典に至りては萬國共に比類を見ざる所なり。陛下厚く聖意を茲に留められ、如斯、舊典式禮は叨に改め給ふこと勿れ。』

皇國に永住するものは恩に狃れて皇國の尊貴と幸福を忘れ勝ちであるが、異邦より來つて皇國を觀れば、嘗て一國

の大統領として大衆の輿望を一身に集めたる名將もいたく皇國國體の萬邦に比類なきに感嘆し、大昔典を宇内の絶美と嘆賞してゐる。

誠や　天皇皇后御自ら農事の艱苦を味ひ民の勞苦を詳かにし給ひ、以て　皇祖皇宗の神靈に仕へ給ふの儀に至つては、實行以て範を國民に垂させ給ふもの、我等は此の尊き御示範に神習ひ、**農事が此の如く神聖にして國家の聖業なるを覺り**、農民亦之を以て光榮とし誇りとして、その聖職に精勵せねばならない。

地主も小作も當局も農の公務であり聖業たるに覺醒し、徒に紛爭を事とせず、私利私慾を抛擲し、共に一體となつて全國民の生命の爲に神聖なる活動を動まねばならぬ。

2　仁德天皇仁慈の大詔

天皇高き屋に登りて民の炊煙甚だ乏しきをみそなはして、その貧窮を察し給ひ、三年免稅の大詔を發し給ふ。後三年、再び高き屋に民の煙の豐かなるをみそなはして皇后に詔し給ふ。

夫レ天ノ君ヲ立ツルハ是百姓ノ爲ナリ。然ラハ則チ君ハ百姓ヲ以テ基ト爲ス。是ヲ以テ古ノ聖王ハ、一人飢寒スレハ顧ミテ身ヲ責ム。今百姓ノ貧シキハ則チ朕ノ貧シキナリ。百姓ノ富メルハ則チ朕ノ富メルナリ。未タ百姓富ミテ君貧シキハ有ラサルナリ。

高き屋に登りて見れば煙立つ
民のかまどはにぎはひにけり

大君は宮殿雨漏り壁毀てども修復し給ふことなく專ら民の力を養はしめ給ふ。——民亦力を恢復すれば自ら進んで宮殿の造營に欣喜雀躍して奉仕する。——これをたゞ權利と義務との觀念のみに動く歐米の國家に比する時、その尊貴なる事萬々である。

大君は至仁至愛の極德を發揮し、民の貧富をそのまゝ御躬らの貧富となし給ひ、一人にても飢え寒ゑるものあらば御躬らの責任となし給ひ、民の痛苦を見給ふ事痛むが如く、民は又あないひの誠を捧げ大君第一と力の限り生命の限り奉公の實を擧げる。君民一體頭と全身との如きは我國體の萬國に比類なき所である。而も現今使用する百姓なる語は、大君の國民を百姓と呼ばせ給ひし愛尊の稱呼である事を思ひ、假にも自らを卑しんではならない。

他國に於ては君主は民を壓迫搾取せんとし、民は民主民權を叫んで君に對立する。蓋し國家の成立とその歷史に於て全く異るが故である。

我國は君民一體、大君は民を本として之を愛撫し給ひ、民は大君を本として身命を抛つて奉仕する。對立なく抗爭なく、而も君臣上下の大義名分明かなる事日月の如く、眞に神聖無比の神洲天子國——地上の神國である。

3　農は天下の大本なり

歷朝の聖詔を拜するに、農を以て天下國家の大本となし、之を奬勵し給ひ、且つ飢饉變災に當つて免稅の恩典ありし事數限りなく、池を掘り水を治め、變災に備ふるの施設を爲さしめ給ふ等、**一意國民生活の安定と産業の振興に大御心を注がせ給ふ**事を拜し奉るのである。

然るに金銀爲本政策に伴ふ弊害として　極端に金銀を尚ひ、利得の多き業を以て貴しとなし、米、生糸、繭等の價格低廉なる今日に至つては農村の窮狀實ふるにものなく、農民自ら農を卑み之を厭ふのみならず商工業者亦之を侮るに至る。

而も商工業の發達したる今日と雖も、國民の生活資源の培養を司る農を以て天下の大本となすに何等變化なく、殊に今や眼前に迫れる大國難に際しては黄金白玉萬貫千箱よりも農産物の尊き事論を俟たない。

農は國民の生命を托すべき一大聖業であり公務である。農民はこの自覺の下に、**勇士が戰場に戰ふの心を以て鍬を**

とり、楠公が千早城に忠勤を抽んでらるゝの憂悟を以て農村を守るべく、當局又農の重要性を本格的に認識し、安んじてこの聖業を勤勞し得るの安固なる地位を與へねばならぬ。

かくて歴朝聖天子の大御心は實現し

天照皇大御神、豐受大神の神慮にも副ひ奉るべく、斷じて異邦の轍をふんで内紛を敢てしてはならぬ。

○

米穀取引所を設けて相場なるものを制定し生活の最大必需品である米の價格をして動揺常なからしめた事はフリー・メーソンの千百機構中でも最も辛辣なる魔の手であつて、これを以て彼等は民心の分裂を煽り、如何に强靭なる國家組織をも土崩瓦解せしむる奥の手としてゐるのである。米穀のみならず一切の生活必需品に對しても同樣の弊害を一掃しなければ國民生活の安定は決して望む事が出來ない。

崇神天皇掘池之詔

農ハ天下ノ大本ナリ。民ノ恃ミテ以テ生クル所ナリ。今河内ノ埴田水少シ。是ヲ以テ百姓農事ヲ怠ル。其レ多ク池溝ヲ開キ以テ民業ヲ寛メヨ。（謹譯）

繼體天皇勸農桑詔

朕聞ク。士當年ニシテ耕サザルモノアルトキハ則チ天下其ノ飢ヲ受クルコトアリ。女當年ニシテ績マザルモノアレハ天下其ノ寒ヲ受クルコトアリ。故ニ帝王躬ラ耕シテ農業ヲ勸メ、后妃親ラ蠶ヒテ桑序ヲ勉メタマフ。況ンヤ厥ノ百寮ヨリ萬族ニ暨ルマテ、農績ヲ廢棄シテ而シテ殷富ニ至ランヤ。有司普ク天下ニ告ケテ朕カ懷ヲ識ラシメヨ（謹譯）

宣化天皇

民命ノ爲ニ穀ヲ非常ニ備フルノ詔

食ハ天下ノ本ナリ。黄金萬貫アリトモ飢ヲ療スヘカラス。白玉千箱アリトモ何ソ能ク冷ヲ救ハン。（謹抄謹譯）

元正天皇

麥禾ヲ兼種スルノ詔

國家ノ隆泰ハ要、民ヲ富マスニ在リ。民ヲ富マスノ本ハ務メテ貨食ニ從フ。男ハ耕耘ヲ勤メ、女ハ紝織ヲ修ム。家ニ衣食ノ饒有レバ人廉恥ノ心ヲ生シ、刑錯ノ化爰ニ興リ太平ノ風致スヘシ。（謹抄謹譯）

桓武天皇

田租ヲ免スルノ詔

惟レ王ノ國ヲ經スルハ德政ヲ先ト爲シ、惟レ帝ノ民ヲ養フハ嘉穀ヲ本ト爲ス。（謹抄謹譯）

八、非常時日本の女性

1 天地開明（天之宇受女命）

天照皇大神の岩戸隱れによつて天地晦瞑萬妖悉く群がり起つた。八百萬の神は岩戸の前に神集ひに集ひ神議りに議り、思慮を盡し、手段を盡し、且嚴かに祭祀を修して神慮を和め奉られた。

平素は物やさしくひかえ目であり乍ら一朝一大事突發に當つては男兒も及ばぬ勇猛心を振り起し、岩をも、徹す大念力を以て之が打開に大貢献を爲すは日本女性の尊嚴なる一面である。

こゝに宇受女命は憂愁に沈む八百萬の神の志氣を鼓舞すべく節面白く天の數歌を唱へ上げ、槽踏み轟かし舞ひ踊られた。八百萬の神はあまりの面白さに一度にドット笑ひ高天原の憂鬱氣分は一掃せられ、岩戸開きの原動力となり手力男の神の力を施すべき機會を與へ得た。

○

精神界の岩戸隱れ　今や皇國の現實世界には　天津日嗣の聖天子輝き臨み給へども、その精神世界に於て國民の多くは皇道即ち　天照皇大神の開き給ひし眞理の大太陽に等しき光りの道を忘れて、神を無視し靈を蔑視し、黄金、

物質を神と仰ぎ生命と尊ぶ物質偏重の歐米文化の黑鐵の岩戸に閉され　天照皇大神の御光に浴する能はず、一切は行詰まりて前途の光明すら認め得ず、萬妖こも〳〵起る暗黑無明の世と化し去つてゐる。

男子はもとより一世の智勇を推倒して岩戸の打開即ち光明世界の建設に努むべく、女性亦天宇受女命に神習ひ一大勇猛心を振り起し　天照皇大神即ち皇道を表に現し奉るに就て大活動を爲さねばならぬ。

非常時に際しては服裝體裁等は第二とし、全身を活かして君國の爲に盡さねばならない。

皇道世に出づれば　天照皇大神の道明かに、高の妖彩をひそめ、天下泰平萬民和樂の皇道日本は出現する。これ即ち現代の天の岩戸開きである。

又天孫降臨に當りては英雄神猿田彦神を說き伏せ、伊牟迦布神（强敵にも敵對出來る神の意）而勝神（人に對して怖めず臆せぬ神の意）の名を現實に現した。

隱忍優美よく强剛を挫いて歸服せしむる、亦日本女性の美點であり長所であつて、非常時に大功を奏する特長である。

2 犧牲（弟橘姫命）

日本女性の犧牲的精神の熾烈なるは古今東西にその比を見ない所である。——母として子の爲に一切を犧牲とし妻として夫の爲めに一切を捧げて盡す、これ天の成せる崇高なる大愛の發露である。

燒津（一說に相模の小野）の神劍神火神風に群賊を平定し給ひし日本武尊は其れより行程を急がせ給ひ、走水海（浦

賀海峡)を渡らせ給うや、海神怒つて風浪荒れ狂ひ、御船は危急に瀕した。こゝに尊の后弟橘比賣命は『これは海神の祟りであるから妾が尊に易つて海中に入りますから、尊は君命を達成して目出度く御報告遊ばされますやう』と、波の上に菅疊八重、皮疊八重、絁疊八重を敷いて其の上にお下りになられた。すると今まで荒れてゐた波は自然と靜まつて御船は無事に對岸にお着きになつた。

七日程たつてから御櫛が海濱に漂着した。で、その御櫛を拾ひ取つて御陵を作つて、そこへ收めた。

○

近時この崇高なる犧牲的精神は漸次銷磨し去り、君國の爲め、社會の爲め大任を負へる夫を、一家の私事の上に束縛して活動を制肘する女性亦頗る多きを加へ來つた。

萬難を排して、夫を活社會に將た戰場に送り、以て君國と同胞大衆の爲に全力を振はしめ、非常時打開に貢献せしむる、これ女性の現在に於てつとむべき大任である。

弟橘姫命の身を海中に沈めて夫の危難を救ひ蝦夷征伐に大功を奏せしめ給ひし犧牲を偲べば、如何なる艱苦をも忍び得る。死を賭して躍進する所、何事か成らざるなしである。

3 神示の外征（神功皇后三韓征伐）

後年豐太閤の神謀鬼策と、戰國百戰百勝の精鋭を擇つて而も遂に不成功に終つた朝鮮征伐を、上古人文の未だ發達せざる時代に於て而も身もたゞならぬ女性の御身を以て、殆と双に血ぬらずして全三韓を從へ給うた神功皇后の功績

は眞に偉大である。

御自ら大元帥として將兵を統領し、堂々海波を蹴つて敵國に渡り、敵國をして一戰を交へず城下の誓ひを爲し、長く臣事せん事を約せしめ給ひし大功に至つては全く天軍の神勇を思はしめ、戰はずして人の兵を屈す是れ善の善なるものなりてふ兵法の奥義を思うて三嘆之を久しうせざるを得ざらしめる。

そのこゝに至りし原因を皇典に求むるに、征討は筑紫の訶志比の宮に於ける　天照皇大神の神勅に出で、祭祀を嚴かにし、兵船に神靈を祭り、兵備、航海、その他一切の施設悉く神示に則つて之を行はせ給ふ。こゝに天佑神助至り、魚族船を負ひ、順風至つて船疾き事矢の如く、勢に任せて進む所新羅國の半を浸す、と記されてゐる。

○

女性の平時に於ける任たる、内を治め男子をして後顧の患なく外に活躍せしむるにある。然れども國家の非常時に當つては時に男子を助けて外に活躍するの要がある。更に危急存亡の刹那に際しては身を挺して國防の第一線に立つをも辭せざる大勇猛心を平素に於て養成するの必要がある。

非常時打開を志す日本女性は、常に神功皇后を以て自らの心に鞭たねばならぬ。

4 南朝の杜石（小楠公の母）

大楠公の首級が足利尊氏から送り屆けられた時、大楠公夫人久子姫は十三歳の正行を頭に正時、正儀、正秀、正平朝成の六人の母であつた。

南江備前守正忠の妹として和歌をよくし、武藝、殊に長刀は一流の奥儀を極め、剰へ魂は鍛練に鍛練を加へられ、二十歳にして正成に嫁し、爾來日本皇國第一の大忠臣大名將たる大楠公の薫化を受けた夫人である。その變に處する態度は流石に見事であつた。

夫の葬儀も滞りなく終り、家來郎黨の決意も頼母しく見えたその夜、正行は母に請うて父の位牌を祀らんと再び持佛堂へ入つた。

強い胸騒ぎを感じた母は廊下傳ひに持佛堂へ急ぎ、一種の劍氣を感じてサッと開けた襖の前には正行が嚴肅な態度で坐つて双肌を脱いだ所であつた。その前には菊水の短刀がある。

○

『お前はお父様が櫻井からお返しなされたお心をどうお思ひぢや。又お父様が生くれば生くる道のあるのを捨てゝ湊川の一戰にお命をお捨てなされたお心を何と御覽ぢや。お父様はお前を力強く思召して居りましたぞ。幼いお前に重い〳〵任務を托ねて、武士の取る最善の手段をお取りなされたのですぞ。お父様のお心を推量ると「わしは死んでも後には正行が居る。正行は幼うても先祖代々忠勇義烈の魂を宿して居る。たとへわしは戰死をしても、一族郎黨を扶持し、成長の暁は菊水の旗を朝風に飜して朝敵を打ち亡ぼし、帝の御代を元の御盛時に返し奉るに違ひない」と、よく〳〵御信用遊ばして居た事が分るでないか。

それにお前は――お前の口から御遺言の數々をこの母に傳へながら、少しの遠慮もなく、少しの考へも無く、お父様の御首級を送られた今日――お父様の御位牌の前で、切腹しやうとは何事です。

お父様の後を受けて、日本國の柱とならねばならぬ身が、緑葉で命を捨てる法がありますか。お前が腹を切つて、誰が楠家の魂を繼いで行きます？　お可愛さうにお父様はお前がそれほどの不心得兒とは御存し遊ばさないでお心安く御戰死をなされたであらう。

幼うても此ほどの道理を知らぬやうで、お父様のお後を繼ぐ事が出來ますか、朝廷の御柵となつて逆臣共の手から射る毒箭を防ぐことが出來ますか。

生くるより、死ぬる方に優れた理のある事もある。然しお前の立場は違ひます。お前の境涯は、石に噛じり付いても生きなければならぬ處です。生きてお父様のお志を繼がなければならぬ處です。

天下は悉く足利殿の脚下に伏しても、楠家の一族郎黨は御先祖から傳はつた忠誠の魂で、朝廷の御爲めに盡さねばなりませぬ。その中の一人がむざ〳〵と命を捨てゝも、夫れだけの弱味となり不忠となる、お前はそこに氣が付きませぬか、お前はそれを考へませぬか。

お父様がお筐にお贈りなされた菊水のお刀にはお父様のお心が籠つて居る。そのお心を身に體して、楠家の精神を後の世に輝かしてこそ、子たる本分を盡すことにもなるが、その刀で腹を切つて、何の孝行になり、何の忠義になると思ふのです。ふつつりと思ひ切つて、お父様にお詫をなさい、そして將來進んで行く大道を定めなさい』

○

三十餘年來養ひ修め來つた強い意志、優しい心、無際限の愛の光、かてゝ加へて君を思ひ國を思ひ夫を思ひ子を思ひ家門を思ふ熟誠より迸る母の諫言に、正行は迷ひの夢忽ちに醒めると同時に『一身を以て日本國の大事に任じや

う、双つの肩に日本國を背負つて立たう』との勇猛心が、正成の位牌から立つ靈氣に打たれて、胸の奥底に定まつた。

あはれ夫人のこの教訓を振り出しとする正行以下六人の愛兒に注がれた教化は、實に南朝五十七年の礎となつた。――忠誠貞淑の一婦人の纖手、よく南朝三代の社稷を保持す。女性の力亦偉大なりといふべしである。

皇國は今や孤立無援四面楚歌の中に正義を宇内に貫徹せんと決意する事當年の楠家に等しきものがある。而も鬱憂は大きく責任は更に〳〵重い。心ある日本女性は須く第二の小楠公の母を以て自ら任じ、忠勇義烈の子弟、第二の小楠公の養育に身魂を傾注せられん事を祈つて止まない。

5 異國に香る（鄭成功の母）

明の大忠臣鄭成功の父は鄭芝龍といつて支那福建泉州の產、豪邁開拓の大功勞者であり、母は肥前平戸の足輕田川七左衞門の女である。

鄭成功は七歲の時母に先立つて明に渡り、後十數年にして母も亦明に渡つた。

當時清軍は破竹の勢を以て南進し諸城を屠り、明室は風前の燈火の如き運命であつた。

泉州の戰も亦明軍の敗績となり敵兵は早くも城に攻め上るや、田川氏（鄭成功の母）は捕虜となるを恥とし、高樓にかけ上り、自刄して江水に身を投じて果た。見るもの悉く『女ですら此の通りである、日本人の忠勇義烈は全く天性といふべし』と感嘆した。――田川氏は全く日本女性の爲め、萬丈の氣を吐いて異國の花と散つたのである。

而も母の教化は直に子の魂を左右する。

明の唐王囚へられ、清兵の獄する所となるや鄭芝龍は厦門に退いて明室の再興に當らんとしたが、清朝より釣るに大利を以て降服を勸むるや、直に節を變じて之に從つた。

鄭成功は父を極諫し『父は如何なれば此の如き不臣の道を踏まれるのか？　私は退いて父と共に清に降れば孝道を或は全うする事が出來ようが、斷じて明朝の忠臣たる事は出來ない。進んで敵に抗する孤忠の臣たらんとすれば、臣道は之を盡す事が出來るが、不孝の子たる譏は免れまい』と。而も父の肯く所とならず、決然父と分れ同志と共に、死に至る迄明室の爲めに孤忠を捧げ、その子鄭經又父の志を繼いで忠節を盡し孫克塽の時遂に清に亡ぼされた。

嗚呼鄭氏三代三十年、克く明朝つ爲めに忠節を盡し、清の太祖をして『鄭成功は明室の遺臣なり、朕の亂臣賊子にあらず』と刺して、彼父子の柩を泉州府石井に歸葬せしめたるもの眞にその誠忠よく敵王を感泣せしめたるものといへる。

○

忠孝を以て支那の原產と思ひ誤る勿れ。彼の國の忠は『三度諫めて肯かれざれば泣いて之に從ふ』の孝である。眞正の忠孝は實に皇國の特產である。

父、臣節を變じて利に走る。而も子克く忠を盡して子孫に及ぶもの、眞に母田川氏の日本人の血と日本魂とを繼げるものといふことが出來る。

6 遊女・喜遊

喜遊は江戸の町醫太田正庵の女であつた。父正庵病んで家貧困に陷り病を養ふの道が絶えた。孝心深き喜遊は、當時他に選ぶべき道なく、遂に意を決し遊女に身を沈めて父の病を恢復せしめんと横濱港崎町岩鶴樓に入つた。

一日米人來つて喜遊を招かうとたが、喜遊は憤然として慨し

露をだにいとふやまとの女郎花
　　ふるアメリカに袖はぬらさじ

と辭世を認め自刄して日本女性の意氣を示した。

賤業に從ふ孱弱い婦女子すら、アメリカ人の買收に對し死を以て節を守るの意氣がある。然るに堂々たる日本男子而も國家の重責を擔ひ至尊の信任を辱なうする使臣や重臣が、米英の脅喝や買收によつて屈辱條約を締結し皇國日本の正義と國是を汚さるゝが如きは、娼婦に對しても恥づべき行爲である。

死を賭して皇國傳來の尊貴なる國體を擁護し天地神明に奉答するの覺悟を以て進まば、來るべき軍縮會議（豫備會商を含む）、國際難局殊に經濟的壓迫等一切を一蹴して、皇國の光輝を燦然たらしむるは易々たらんのみだ。

九、國辱條約の清算

（口繪六參照）

1 國辱華府條約を即時廢棄せよ!!

日本は世界の宗主國である。

此の一點に就ては既に屢述べた所であるから此には之を省略する。而して

皇軍は救世の活人劍である。

歐米諸道列強の軍備の如く野望遂行の兇器でもなく弱者を壓倒する爲の殺人劍でもない。正義を四海に敷き、世界平和を奏す惡逆を制御すべき、地上唯一の天立君主たる　日本天皇の神劍である。

故に世界（最少限東洋）の平和を確立するに足るの軍備を要し、他よりこの神聖なる軍備の制肘を受くべき何等の理由はない。

古來皇國を細戈千足の國と呼ぶのは精鋭なる戈即ち兵器と秀子即ち忠勇義烈の武人の滿ち足る國の謂である。**この神聖にして精鋭無比なる兵器と兵員は、多々益々世界平和の確立に貢獻する。**故に列強の殺人劍は之を制限すべく、皇國の活人劍はその不足が痛感せられる。彼等の術策に陷れられて之を縮少するは斷じて不可である。

一歩を退いて彼等の要求を聽くも尙自主平等を一寸たりとも讓る事は絶對に不都合である。

三割六分の劣勢海軍　然るにワシントン條約に於ては主力艦、航空母艦に於て十對六の必敗的劣勢比率を甘受してゐるのは何事であるか。

六割海軍は十割海軍と戰ふの時、その戰鬪力は**自乘比の法則**により一〇〇に對する三六となり、實力に於て三割六分の劣勢となるので、古來質に於て同一なる時六割海軍の全滅が原則とせられてゐる。而も十割海軍は六割海軍と同力の犧牲を拂つても尙八割を殘す事は數理の明示する所である。既に排水量及備砲を拘束した今日質に於て甲乙はなく、寡を以て衆を破る事は至難である。

身勝手の軍縮　米國は同會議に於て主力艦を三萬五千噸以下に制限したが、三萬五千噸以上ではパナマ運河が通過出來ないからであり、英國の二萬五千噸以下とする案を一蹴し去つたのは、かゝる小さい艦では太平洋の海波を蹴つて日本海軍を撃滅する事が出來ないからである。即ち彼年來の宿望である**東洋進攻陣**を完成する事が出來ないからである。

日本攻略の傳統海軍　一九〇六年米國大統領ルーズヴエルトは上院海軍委員長ユーゼン・ヘールに對して『日本は生意氣で、感情的で、好戰的だ。殊に日清、日露の兩戰爭に勝てからは、益々增長して來た。米國は是非共日本に痛棒を加へる事を目標として、大海軍を建設せねばならぬ』と放言した。米國の大海軍政策は蓋し日本攻略にあり、而もルーズヴエルトの誕生日が海軍紀念日となつてゐるのを見ても、由來日本攻略が米海軍の傳統である事を斷言し得る。

軍縮によつて東洋進攻陣を完成　この侵略を傳統とする米國が海軍軍縮を提唱したのは決して平和を愛好する爲

でも何でもない。米海軍當局は『軍縮條約を結ぶことは、外國の援助を得て艦隊法を制定實施して、東洋進攻陣を完成するのも同樣である』と揚言してゐる。

事實米國では幾度か大海軍設立の政策を立て、豫算を要求したが、自給自足の出來る大陸國米國では國民の大部分が海洋の必要性も海軍の有難味も知らない。此等の國民から選擧せられる議員によつて豫算は常に削減せられ、主力艦とボロ驅逐艦とばかりだと言つてもよい不均勢な不具な海軍しか持合せがなかつたのである。それが華府條約のお蔭で自國の海軍を整理し、その完全なる成長を見る迄日本をして手をこまぬいて待たせて置ける事となつた譯である。

現有勢力主義の豹變　華府會議に於て日本の主力艦、航空母艦が米國の現有勢力の六割（噸數に於て六割に近くても精鋭揃ひの日本主力艦は作戰上から見て對米十對十一、十二の實力があつた）だと主張して之を押しつけて了つた米國は、ロンドン會議に於てはどう豹變してゐるか。

當時補助艦の現有勢力は、八吋巡洋艦、日本八隻、米國一隻、乙種巡洋艦に於て日本二一隻、米國十隻、驅逐艦、造艦四年以內の精鋭日本三萬五千噸以上、米國皆無、造艦八年以內のものすら日本約四萬三千噸、米國皆無、潛水艦造艦四年以內の精鋭日本二萬七千噸以上、米國二千七百十噸、八年以內のもの日本五萬噸以上、米國約三千三百噸であつて、全く比較にならなかつた。

曩に華府會議で一〇對六を甘受した日本は當然補助艦によつて劣勢を補はんと決意してゐた。然るに英米は此の日本補助艦の現有勢力を尻目にかけて補助艦總體比率に於て七割弱を押しつける事に成功してゐる。彼の暴慢我の腰拔

共に沙汰の限りである。日本全權は何故に現有勢力を以て彼の要求を一蹴しなかつたのか。

今や米國は倫敦條約によつて得たる保有量による大規模の造艦計畫を樹て、來る一九三九年迄には此の傳統的野心を貫徹すべく、東洋進攻陣を完成せんとしてゐるのである。

國辱の證跡　かうした米國や英國の御都合主義、勝手氣儘の條約に御無理御尤もと頭を下げた屈辱、國辱條約が華府條約であり倫敦條約である。その歴然たる證據を今一つ御目にかけやう。

華府條約の劈頭に

『亞米利加合衆國、英帝國、佛蘭西國、伊太利國及日本國ハ云々』

と記され、倫敦條約の劈頭にも亦

『亞米利加合衆國大統領、佛蘭西國大統領、「グレート・ブリテン」「アイルランド」及「グレート・ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、伊太利國皇帝陛下並ニ日本國皇帝陛下ハ云々』

と記されてゐる。それが國際的儀禮に從つてアルファベット順であるならば我れ亦何をか云はんやであるが、ユーナイテッド・ステーツ・オヴ・アメリカ（亞米利加合衆國）が最後に來る筈を最初に持つて來て居る。國際的儀禮によらないならば比率順にすればよい。然るに佛伊の下に置かれてゐる。

これによつて之を見れば、最初から日本は弱小國扱ひと有色野蠻國扱ひを受けてゐるのである。從つて我等の祖先が常に命にかへて守つて來た、而も我等も亦生命を賭して護り且尊敬しつゝある大日本帝國の名と　日本天皇の御名が最後に記されてゐる一事を見ても、その屈辱國辱條約である事が明瞭である。

遣外使臣と政府當局に日本が皇國にして神國なる一大信念なく、たゞ敬畏恐米の軍患に犯されて居た事が、此の國辱を招いた最大の原因である。

此の如き屈辱條約は一時も早く廢棄撤廢すべきである。

華府條約の陷穽——第二十三條——

華府條約には氣のつかない所に恐ろしい陷穽がある。それが第二十三條である。之を拔萃すれば次の通りである。

本條約ハ千九百三十六年十二月三十一日迄效力ヲ有ス。

締約國中何レノ一國ヨリモ右期日ノ二年前ニ本條約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告セザルトキハ本條約ハ締約國の一國が廢止ノ通告ヲ爲シタル日ヨリ二年ヲ經過スル迄引續キ其效力ヲ有スベク爾後本條約ハ締約國全部ニ對シ廢止セラルベシ。（中略）

何レカノ一國ノ爲シタル廢止通告ガ效力ヲ生ジタル日ヨリ一年內ニ締約國全部ハ會議ヲ開催スベシ。

右は例を擧げて言へば、日本が若し期限滿了の二年前の本年末迄に廢棄の意思を通告せずに置いた時、若し米國が昭和十一年末に廢止の通告を出せば、この條約が後二年間有效となつて米國に軍備擴張の期間を與へる事となるのである。

又來年は倫敦會議の更改會議が行はれ、その豫備交渉が本年十月倫敦に於て行はれる事になつてゐる。故に豫備交渉に先立つて華府條約廢棄の通告を發する事が最も必要である。然らずんば『日本は華府條約の存續を希望してゐるものと認める。倫敦條約は元來華府條約の延長であり、五・五・三の比率は華府條約で決定して居るのであるから、華

府條約に反對なき限り、比率更改の理由を認めぬ』と高飛車に出るに決つてゐる。

本秋の豫備交渉も來年の本會議も共に華府條約の廢棄によつて白紙的自由の立場から自主的國防を確立し、國家を

して富嶽の安きに置き、又皇國に仇せんとする米國の東洋進攻陣を撃滅する強烈なる決意を以て之に臨むのでなけれ

ば、必ずや華府、倫敦兩會議の二の鐵となつて、戰はずして屈服するの最後的一大國辱を招く事必然である。

九月七日の閣議で兎も角廢棄の通告決定を見たのは喜ぶべく、海軍や愛國團體の決意の反映と見るべきである。

平和と負擔輕減に貢獻なき軍縮　華府、倫敦兩條約の目的とする所は『一般の平和維持に貢獻し且軍備競爭の負擔を輕減せしむる』にある。

然るに日本の海軍豫算は條約締結前二億二、三千萬圓であつたのが、**現在五億圓**に上つてゐる。そして尙且國防の安全感が得られない。

又戰へば必ず敗けるといふやうな不平等の比率を設ける事は、そこに**戰爭を誘發する危險が最も大**である。勿論弱小な比率を有つ國から戰爭を仕掛ける事はあるまいが、必勝的强大比率を有する國からは何時でも戰爭を仕掛る事が出來るから、決して平和の維持など出來るものではない。眞に平和維持に貢獻する爲にもこんな危險な條約は一刻も早く廢棄して軍備の自主平等權を確立せねばならぬ。

又太平洋防備限制條約が華府條約廢棄と共になくなると日本に不利だとか、米國はアラスカへ根據地を造るとか宣傳してゐるものが居る。しかし要塞や海軍根據地は如何に强大でも直接これが日本を襲撃する事は絶對に無い。そこに居る艦隊が日本を脅威するに足らぬものであれば問題ではない。問題は日本を襲ふ事の出來る艦隊そのものでなけ

ればならぬ。

斯く觀じ來れば皇國日本の眉睫の大問題は、卽時華府條約の廢棄通告を發して、堂々國是の貫徹に邁進するにある日本を撃滅せんと最初から計畫してゐる對者の機嫌氣褄を取る事は、徒に國辱を大にし仇敵を增長せしむるに過ぎない事は、既に過去兩條約が實證して居るではないか。（昭和神聖會發行『軍縮問題と米國の對日策戰』參照）

2　噫!!　友鶴!!

ワシントン軍縮會議によつて**右の頰を打たれ**主力艦並に航空母艦を十對六に、ロンドン會議によつて更に**左の頰を打たれ**補助艦殊に大巡洋艦を十對六に蹴られ、潛水艦要求量を蹂躙られた日本海軍は、このまゝでは永久に頭が上らない。――太平洋から日本の勢力を驅逐し去るのが英米の魂膽であるのだから。――事實、從來の戰史を繙いて見ると、比率が六割乃至八割の海軍は必ず大敗して居るのである。

然るに**滿洲事變の勃發以來**、日本對世界の國際情勢は一變し、日本の東亞、アジアに對する平和維持の責任は更に重且大を加ふるに至つた。

十對六或は七の比率を以てしてはこの重責を果す事は絶對に出來ない。そこで條約制限外の六百噸以下の小艦艇を澤山作つて、條約上の劣勢を補ふ爲苦心慘憺の結果作り上げたのが友鶴級の水雷艇である。（友鶴が復原力を失つたのも强大な武裝をさせた結果であるといへる）

而もそれのみでは滿足出來ず、暗黑、而も風速二十米といふ暴風の海面を燈火管制の下に水雷襲撃の猛訓練が行

友鶴艇内將兵の遺書

はれた、その（昭和九年）三月十二日午前一時からの演習中に友鶴は遭難したので、約言すればワシトン條約の延長たるロンドン條約が友鶴を顚覆せしめ、幾多忠勇義烈の陛下の股肱を鬼籍に入らしめたのである。

イ、遭難艇内に於ける

友鶴將兵の遺書

水雷艇友鶴の遭難者中、艇内で壯烈な最後を遂げた殉職者達はいづれも死に直面し乍ら義勇奉公の念に燃え、あるひは艇壁にフレームに器物の表に、ナイフで又は鐵片で、ほとばしる誠忠の心情を刻み込み、見る人をして悉くその壯烈に泣かしめてゐる。

○『一死奉公の秋、恨むらくは三六年に死なざるを』井上三等主計兵曹

○『天皇陛下萬歲、友鶴萬歲』古谷機關中尉

○『御國の爲に死す、本望なり』一等機關兵國重至正

○『われら今喜んで死す、帝國萬歲』大島特務少尉

○『僕は笑つて死んで行きました』（志願兵十代の青年）三等機關兵山田清美

○『午前四時半、急に左に傾き顚覆す、極力防水に努む、天皇陛下萬歲』一等水兵田中武雄

○『約一時間を經てり、一同元氣にして沈着なり、未だ救助に來れる模樣なし、君に捧ぐ、一同口を揃へて覺悟しをる』

『職責を盡して皇國の繁榮を祈る』

『潔く死んで行きます』渡邊二等兵曹

ロ、岩瀬艇長の遺書

鬼神忠烈に泣く

壯烈無比の最後を遂げた水雷艇友鶴艇長岩瀬奥市少佐が北支の風雲急なる昭和八年一月奥鎮守府警備隊練習驅逐艦長の職にある際、認めて置いた遺書が昭和九年三月十八日佐世保市園田町の自宅から發見され同日午後六時半佐世保鎮守府から公式に發表せられたもの。

妻れい子、長女眞知子に與ふ

一、必勝率公は海軍入籍の當初より深く心に期するところ、況んや年來の希望たる驅逐艦長の職を率じ、名譽ある艦上にその最後を飾る、吾これを武人の本懷として深く滿足し笑つて死につくものなり。

一、國恩は廣大にしてわが死後に於ても汝等遺族の衣食に窮せざる保護を與へらるゝことあるべきも、れい子は吾家の柱石としてその運命を双肩に荷へる重責を自覺し、奮勵自重戸主としてまた母として眞知子の養育上貴重なる活模範たれ。もし自活の氣力を失ひ國家の保護をのみ恃みて漫然安逸の日を送らば、汝等母子相次いで身を亡ぼすに至らん。れい子よ、眞知子よ、これ夫として父として汝等に與ふる最後の戒めなるぞ。

一、以上述べたる所により戸主として父として遺す最も貴重なる遺産は、健全なる血統と自活の氣力なるを知るべし。物質的遺産は子孫繁榮の一因たることある半面、家を亡す主因たる場合あり。これに比し善良なる遺傳的および精神的遺産の如何に貴重なるかを深く心に銘記し、子々孫々に傳へ永く吾家の守りとせよ。

忠靈を慰む

嗚!!屈辱軍縮條約、遂に友鶴を沈めたり!

天祐の國、この遭難あり。何の天意ぞ!

『神洲の尊嚴を瀆す屈辱外交を清算して、細戈千足の國の眞面目を發揮せよ』と。

眞にこの忠靈を慰めんとするものは、誓つて、屈辱條約を破棄し、自主的國防を完備せよ!!

一〇、皇化宇内

1 大義名分（大英雄卽大忠臣）

覇道を以て立つ列國に於ては大英雄卽主權者となるが普通であつて、帝王と雖も勢を失へば屢々その王位と生命とを失ふに至るものである。

然るに皇道を以て立ち天立君主を奉ずる日本皇國に於ては大英雄卽大忠臣である事が本則であり、之に從ふものは榮え、之に反するものは一時榮える事はあつてもやがては亡ぶ。これ天地開闢の始めより君臣の大義名分が日月の如く明かであるからである。

豐太閤は戰國日本を統一したる大英雄である。身を尾張の貧農より起し、忽ちにして天下を平定した。太閤の前に太閤なく太閤の後に太閤なしといひ得る日本の代表的大英雄大名將である。

而も大義名分を知る事極めて明かに、大いに御所を修復し、伏見桃山に聚樂第を造營しては時の　天皇　上皇の行幸を仰ぎ、永らくの戰亂によつて宸襟を惱まし給ひし叡慮を安んじ奉り、且部下の大小名をして大君に忠勤を誓はしめ、更に朝廷百官の所領を永久に保護すべく起請文を書かしめてゐる。

又自ら**神州の聖天子を奉じて世界統一の大志を抱き**、朝鮮、明の無禮を責めて問罪の師を起し、更に琉球、臺灣、

フイリッピン等を朝貢せしめんとする等、その悉くが國威を輝かし皇威を發揚し奉るにあつて、決して自己の名の爲めに、一家の計の爲めに徒に兵を動かしたるものではない。

大明と和せんとするに當つて、史官たま〳〵『汝秀吉を封じて日本國王となす』の一句に讀み到るや、豐公怒髮天を衝き眦を決し、神洲の大義名分を絶叫して明使を叱咤し、明の封册をズタ〳〵に破る等、眞に日本精神（皇道精神）を體せる大英雄大忠臣といふべきである。

單に智謀秀で膽略優れ豁達自在而も大膽にして小心、又藝術を解する事深く、大英雄の素質を有したのみでは、**神州鎭護の神明**は決してこの大業を爲さしめ給はなかつたであらう。彼の太閤の神と皇上を尊ぶ至誠に神明の加護ありて功成り名を遂げしめ給うたものである。

彼の志が一身一家の名利にあらざりし事は、明との媾和條件七ヶ條に添えたる告諭文に左の一節がある。『（前略）故に**壯年に及んで夙夜世を憂ひ國を憂ひ、再び聖明を神代に復し、威名を萬代に遺さんと欲し之を思ふて止まず**（後略）』と。彼の志は皇權の恢復と伸張並に國威の宣揚、皇化宇内を措いて他に何物もなかつたのである。

2 神勅の實行（征韓論卽救韓論）

征韓論の表向理由は朝鮮の無禮を責め問罪の師を興すにあつた。之を主張したるものは西鄕隆盛、副島種臣で板垣退助、江藤新平、後藤象次郎も之に和し廟議將に決せんとする所へ歐米より歸還したる岩倉具視、大久保利通、木戸孝允等海外の情勢を說き、未だ征韓の機にあらず、專ら內治に意を注ぎ力を養ふべきを主張し、激論の末征韓の議は

止み、之を主張した人々は遂に職を辭するに至つた。時正に明治六年十月であつた。

然るに征韓論を主唱したる西郷隆盛の心事は、その太政大臣三條實美に進言したる彼の言葉に明かである。

『太政大臣は篤と聞いて下され。今の太政大臣は昔の太政大臣でなく王政復古明治維新の太政大臣でございます。日本を昔からの小日本で置くも、大神宮の神勅通り、大小廣狹の各國を引寄せて、天孫のウシハギ給ふ所とするも皆貴殿の双肩に懸つて居り申すのでございます。』

更に言葉を繼いで『今朝鮮を王化に潤はして置かねば後に至つて必ず悔いる事がある。貴殿は私よりお年が若いから長生きをせられるであらうからよく見て居て頂き度い』といつてゐる。

大西郷は　天照皇大神の御神勅として傳へらるゝ延喜式祝詞の一節『**狹き國は廣く峻しき國は平けく遠けき國は八十綱打掛けて引寄する事の如く皇大神の寄さし奉り給へば**』なる**皇化を宇内に敷き**世界萬民を大君の治下に安息せしむるの第一歩として、虐政と内亂に苦しみ頑迷時勢を解せず徒に排外運動を事として大事を誤らんとする朝鮮を眞に救濟せんとする**救韓論**であり、皇道精神の發露の外何物もなかつた。この大經綸に蹉跌した日本は明治十七年に朝鮮事變、二十七年に日清、三十七年に日露の大戰と十年毎に國難を忍ばねばならなかつた。

更に征韓論に於て學ぶべきは、當時の**政治家に敬神の念慮**が厚かつた一事である。　天照皇大神、春日、八幡兩神の御神號を掲げ、その前にて論議してゐる書を見受ける。征韓を是とするものも否とするものも一點の私心なく、一意君國を思ひ國民を思ひ俯仰天地神明に恥ぢず公明神の如き心境を以て論議し、その間自己の名利なく黨利黨略はない。現在の政治家たるもの大いに反省して可なりである。

一一、皇國の光榮

1　宇内歸一の神國

ネブカデネザルの夢とダニエルの解說

舊約聖書ダニエル書第二章に、日本が世界を統一し而も永遠に滅びない事が明かに豫言せられてゐる。其要旨は左の如くであるが詳細を知らんとする人は聖書と王仁文庫第二篇『國教論集』を熟讀せられよ。

西暦紀元前六〇六年から同五三八年頃迄附近の諸國を征服して所謂天下を取つてゐたバビロン王國のネブカデザル王は不思議な夢を見た。非常に之を氣に病んで睡る事さへ出來ず、全國に命を下して博士、法術士、魔術士などを集めて夢とその解明しとを求めたが誰にも出來なかつた。然るにユダヤ人の囚人の一人であるダニエルといふ青年が天の神の默示を得て之を解き明した。その解說がそのまゝその後の世界歷史となつて實現してゐるのである。

ネブカデネザル王の夢といふのは、恐ろしく大きな像を見たのである。その頭は純金、胸と兩腕とは銀、腹と腿とは銅、脛は鐵、足は一分は鐵一分は泥土であつた。そして王が之を見てゐると、一箇の石が人手によらずして擊られて出で、その像の鐵と泥土との足を擊つて之を碎いた。するとその鐵と泥土と銅と銀と金（巨像全體）は皆共に碎けて、夏の禾場の糠のやうに成り風に吹き拂はれて飛び散つて了つた。そしてその像を碎いた石は大山となつて全地

に充ちたといふのである。

ダニエルの解明しを簡單に述べると、金はバビロン王國であり、之に續いて少し劣つた國(銀の國)が興り、次には銅の國が起つて世界(その附近一帶の意)を治める。次には鐵の如く堅い國が起り、次で足が鐵と泥土とから成つて和合せない如く又趾が分裂してゐる如く、分れて相合せない多數の國が出來ると說いてゐる。

最後に『**此の王等の日に天の神一の國を建て給はん**、是は何時までも滅ぶる事無らん。此國は他の民に歸せず、却つてこの諸〳〵の國を打破りてこれを滅せん。是は立ちて永遠にいたらん。かの石の人手によらずして山より擊られて出で、鐵と銅と泥土と銀と金とを打碎きしを汝が見給ひしは卽ちこの事なり。

大御神この後に起らんところの事を王にしらせ給へるなり』と結んでゐる。

其後の歷史に之を徵すれば正に左の如くである。

金—バビロン王國—西紀前六〇六—五三八年
銀—メデヤペルシヤの同盟國—同　五四八—三三一年
銅—ギリシヤ帝國—同　三三一—一六八年
鐵—ローマ帝國—同　一六一年—
泥土—ゲルマン十小王國

卽ち西曆紀元前一六一年に猶太國民と契約を結び遂に天下を統御した羅馬帝國は、西紀三五一年から四八三年までに分裂して十個の小王國となつたが、現今の歐洲各國は是等十小王國の末流であり、これが現在如實に全世界を分割して互ひに覇を爭つてゐる事は全く豫言の通りである。

此の王等の日卽ち現代に於て天の神が一つの國を建て給はんとある如く、日本は明治維新に於て新しき日本を建て昭和皇道維新によつて更に新しき皇道日本を建てんとしてゐるが、これ全く天の神の御意志に基くもので、その發達が世界の驚異の的となつてゐるのは當然である。

日本こそは人手によらで擊られた石、卽ち人爲によらず神によつて建てられた國であり、而もその**國歌は明かに惟神に成長する石卽ち巖をうたつてゐる**のも全く符節を合するものがある。

滿洲事變以來猛然として起ち、世界を我物顏なる巨人・白人列强の足元を見すかして**聯盟脫退の一擊**を加へ、之に

端を發して日本對世界の問題は益紛糾し來つてゐるが、やがて巨像を粉碎して**大山と(オホヤマト)(大日本・大大和)なつて全地に充ち、**世界統一の大業を成就する事はこの豫言の明かに示す所であり、明治二十五年以來日本に顯現したる神人をして大神の常に警告せしめ給ふ所である。

更に日本の國際的孤立と聯盟その他との關係及び皇國本來の使命は左の聖言に明かである。

新譯全書ペテロ前書第二章に『我れ選びし所の貴き隅の首石をシオンに置く』と記され、又『此の石信ずる爾等には貴き物となり、信じざる者には工師に棄てられて隅の首石となれる石となり、また躓く石礙くる岩と爲るなり』と記されてゐる。

シオンとは日照す所の意であり又神意の天に成りませる如く地にも成る所であり、それは日本を意味する。大神は日本に世界平和の大殿堂の最も貴き隅の首石を置かれて居るのである。

然るにこの日本はその眞實を知るものには貴きもの即ち世界平和の最大礎石であるが、信ぜざるもの疑ふ者には、**聯盟など自稱世界平和の建設者(工師)**に棄てられて隅の首石即ち極東の盟主程度に扱はれ、又聯盟やアメリカ、ロシア等に取つては**彼等の企圖する世界平和工作の邪魔物**即ち躓く石礙くる岩となる譯である。

こゝにも石が日本を意味し而も世界平和に對し偉大なる實力を有するを表明したる一節を明かに認める事が出來るのである。

この石こそは國歌の示す　日本天皇であり、世界の大救世主であり、萬代不易の眞理たる皇道であり、君民一體岩よりも堅き皇國である。日本の世界統一は神の定め給ふ所、斷じて日本人の自惚ではないのである。

2　世界の頭腦國日本

嘗て獨逸のカイゼルは我等日本人を稱して『黃色い猿』と呼んだ。皮膚が黃色で而も人眞似がうまいといふ意味である。

白色人種は世界最優秀の人種だと自惚れてゐる。どの民族にも自惚はあるのだから、白人の自惚を暫く許して論を進めやう。

成る程日本人は遠き過去に於て**支那文明、印度文明**をその本國よりも上手に眞似たし、近代に於ては**歐米文明**を巧に眞似た。しかし猿は如何に上手に眞似ても人間以上には出られない。然るに日本人は歐米人を眞似て而も之を抽く事一歩又數歩である。**世界最優秀民族白人より數歩優秀性を示すものは既に人ではなく又猿でもなくそれは神でなければならぬ。**日本人は實に神洲の神民であるのだ。

精神的方面に於ては優れてゐるが**物質文明**に於ては遠く歐米人には及ばぬと考へてゐる同胞が相當多い。そこから追隨外交や軟弱外交が生れ、外國式政治、教育、宗教、思想がもてはやされた。

しかし日本人が物質文明に於て後れたのは素養がない爲めでなく永らく太平の夢を貪つて鎖國してゐたからである。明治の少し前から眼を醒まし、約七十年で殆ど彼等と等しくなり、更に彼等より進んだものも相當の數に上つてゐる。『物質文明に於ても決して彼等に劣らない』この自覺が最も必要である。**自覺さへ出來れば、事實はもうトツクに彼等白人を凌駕してゐるのである。**

海軍の建艦術は全く世界一であつて、戦艦陸奥長門、一萬噸級巡洋艦高雄、愛宕、驅逐艦、潜水艦、いづれも列強海軍に一頭地をぬいてゐる。又陸海軍の戦略戦術も最優秀卓越してゐる。

農業は狹い土地から優良品を多産する點に於て群を抜き、南米、北米に於ても日本移民は農業天才の名を恣にしてゐる。

工業は造艦造船に於て、紡績綿織等に於て世界一である。綿業の元祖英國ランカシヤ地方では逆に日本の豐田式自働織機を購入して居り、製品の優秀さ、職工の能率に於て既に遠く日本に及ばない。毛織物に於ても數年前より日本製品は舶來品より優良なるもの多く、爲めに舶來品は優秀なりとの傳統はその根底を失ふに至つた。

此の如く農に於て工に於て優秀なる能力を有する日本人によつての製品はその優秀と廉價と、加ふるに爲替安と工賃安の波にのつて世界の市場を征服し先進列強をして悲鳴をあげしめてゐる。

發明品に於ても優秀電送寫眞機、一秒間六萬枚の超スピード撮影機、織機、内面艶消電球を始めとし世界的の發明が無數にある。發見に於ても同樣である。

更に鐵道の比類なき正確性は恰も時計の如く外國鐵道の追隨を許さゞる所、機關車修繕の速さの如き露人は火星の世界へ來たのではないかと驚いた程である。ロシアで三十日かゝるものが僅六日で出來上る。

水泳日本の世界制覇なども有名であるが、日本人の頭の優秀さは特別である。それは海外移民の學童がクラスの一二、三番迄は大抵占めて了ふ事でも解るが、英國の將棋など一かち數へられたものが直ぐ五分々々になり、やがて勝ち通しになるのを見ても解る。

日本は世界の中樞頭腦國であるから、腦細胞が靈妙な働きをなす最優秀細胞であると同樣、日本人は世界最優秀民族であるのだ。

京都帝大醫學部教授足立文太郎博士の**軟部人類學**、中村直躬博士の**人種生理學**によつても、日本人が歐米人に劣らないのみならず、優れた點を多數持つてゐる事は學理的にも明かである。

同胞各位の一大自覺と一大奮鬪を祈る次第である。

3　日出づる國の大業

日本の兒等に!!

佛人　ポール・リシヤール

日本人自身が世界を統一する使命があるとか、世界の頭腦國であるとかいへば、それは日本の一人よがり、自惚に過ぎないと嘲る日本人さへ居る。こうした日本人は好んで歐米列强に師事し追隨する。所が心ある外國人は、外國カブレの日本人に先んじて日本が世界統一の使命ある事を喝破し、又日本の世界統一によつて始めて全世界は救はれると斷言してゐる事は既に　明治天皇御宸翰の部に揭げた所である。

左に揭げる詩『日本の兒等に』はその一つで、佛國の哲學者にして詩人である。ポール・リシヤールの日本讃美の詩である。彼は自國にあつて日本を研究する事深く、戰亂の歐洲を出でゝ世界を統御すべき地上唯一の君主をたづね

て世界を遍歷し、大正六年日本に來り滯在半年、日本の世界統一の大使命を確認した。就て彼が如何に深く日本を觀察し憧憬しあるかを知るに足る。

同氏は泰西文明を評して『其形相外觀の莊嚴華麗なるに反して其精神內容の野卑陋劣なる恰も盛裝せる娼婦の如し』といひ、日本を評して『正しく是れ天が久遠の前より世界の爲めに準備し構築し培養し愛護し來れるものたることを確認せり』と最高級の讃辭を呈してゐる。

日本の兒等に!!

曙の兒等よ、海原の兒等よ
花と焰との國、力と美との國の兒等よ
聽け、涯しなき海の諸〳〵の波が
日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を
諸子の國には七つの榮譽あり、故に又七つの大業あり
さらば聽け、其七つの榮譽と七つの使命とを
一、獨り自由を失はざりし亞細亞の唯一の民よ、貴國こそ自由を亞細亞に與ふべきものなれ。
二、曾て他國に隸屬せざりし世界唯一の民よ、一切の世の隸屬の民の爲めに起つは貴國の任なり。
三、曾て滅びざりし唯一の民よ、一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴國の使命なり。

四、新しき科學と舊き智慧と、歐羅巴の思想と亞細亞の思想とを自己の裏に統一せる唯一の民よ、此等二つの世界、來るべき世の此等兩部を統合するは貴國の任なり。

五、流血の跡なき宗教を有てる唯一の民よ、一切の神々を統一して更に神聖なる眞理を發揮するは貴國なるべし。

六、建國以來一系の天皇、永遠に亙る一人の天皇を奉戴せる唯一の民よ、貴國は地上の萬國に向つて、人は皆一天の子にして、天を永遠の君主とする一個の帝國を建設すべきことを敎へんが爲めに生れたり。

七、萬國に優りて統一ある民よ、貴國は來るべき一切の統一に貢献せんが爲めに生れ、また貴國は戰士なれば、人類の平和を促さんが爲めに生れたり。

曙の兒等よ、海原の兒等よ、此の如きは花と焰との國なる貴國の、七つの榮譽と七つの大業なり。（大正六年）

○

ポール・リシャール、國籍は一佛蘭西人なれども、皇國の國體と使命に就て日本人も及ばぬ透徹した理解と信仰とを持つてゐる。日本人たるものは當に三省して皇國天來の使命『世界統一』に目醒め拱手する事なく逡巡する事なく、東亞の爲め亞細亞の爲め將又世界の爲めに起たねばならない。かくする事が卽ち日本を救ふ唯一の方策でもあるのだ。（『皇道の栞』一二六頁――一三二頁參照）

4　皇道・王道・覇道

皇道　は天地惟神の大道が我皇國に結晶し具現したものである。

全大宇宙を一神格（一人格）として治め給ふ宇宙の主神にまします　皇大神は地上の萬國を治め給はんが爲、地上の中樞頭腦として皇國日本を造り、之に地上の統治者として天立君主を降し天意卽ち神の御意志を實行實現せしめ給うた。而して之が天業を補翼せしめんが爲五伴男を始めとし八百萬の神を授けて旗下となし給うた。これ卽ち天孫民族であつて何れも祖を同うする血族である。

故に皇道は皇國日本以外には行はれし事なく、君主は神の立て給ふ所の天立、神意卽ち天意に從つて祭政を行はせ給ひ、德は人德を超越したる御稜威（神德）であり、指導原理は璽筴劔に表明せらるゝ神の仁愛公明勇斷である。皇位は天佑神助と至尊の御稜威によつて天地生え貫であり無限であり、萬世一系天壤無窮と稱せらるゝ所以である。

加ふるに君民同祖一體、至仁至愛の君德とあないひの誠忠渾然として融合し、義は君臣にして情は父子を兼ぬる所國民は悉く大君の大德に悅服信從しその堵に安んじ安心立命を得て國家は正に天下一家天國そのまゝである。

王道　は支那上古に於て行はれた道であり、今復滿洲帝國は之を以て國を立てゝゐる、皇道に次ぐ良き道である。

王道の指導原理は儒敎によつて明示する仁義である。仁義禮智信、君臣父子夫婦長幼朋友等の五常五倫を重んじ修身齊家を基礎とし遂には治國平天下を招來せんとする公明の道である。

故に之を他邦に行ふ時は大いに可なるも、皇國に行ふには缺くる所あり、適せざるの道である。その最大なるものが禪讓放伐であり易姓革命であり、民主民本の思想である。

王道は德の高き者が天命に從つて王者となる事となつてゐる。故に民間に有德者があれば王はその位を子孫に讓らずして之に禪り之に讓るのである。又王者暴逆にして德を失へば忽ち匹夫となり、その位を逐ひ放たれ又は伐ち亡ぼ

される。之を**禪讓放伐**といふのである。こゝに天命革まり王者の姓易る。易姓革命の語ある所以である。

而も王道に於ける主權の尊嚴は皇道に於けるものと異り、孟子の說に聽くも、民爲貴、社稷之次、君爲輕とあり、**民主民本**の國であつて王者は之を守護するの役目で、主體は民であり王者は輕しとせられてゐる。これ皇國と大いに相違する所である。

而も王者の德たる、結局皇道の如く　皇大神直接の守護あるにあらず、人德の範圍を遠く出でず、王者は民意を尊重するに急であり、民意に反すれば忽ちその位を失ふ。故に民立の君主といふが至當である。

神定の王位と王統と無く　皇大神(宇宙主神)直接の守護なく、王位は德を追うて轉々として動き常に有限である。王道にしてよく治まる時は皇道の治と選ぶ所なきに似たるも、王者の轉々する所、悅服あり屈服あり、民樂安心するもの不安なるものあり、國家の狀態は中有の如く、天國の相のみを現はさず時に地獄相を現す。殊に放伐に於て然りである。

覇道　は力を以て治國の要諦とする。武力は勿論、學力、金力、智力等の力の大なるものが弱者を壓倒して君臨するのである。

支那に於ては王道が放伐によつて力萬能の惡例を殘してより、力を以て覇を制するの風を殘し、春秋の五覇の如きを生じた。而もこの時代は覇道を以て天下を取り、其後は王道によつて治めんとしたのであるが、遂に力萬能の覇道に墮して了つたのである。

結局覇道の指導原理はわれよしであり、優勝劣敗弱肉强食の强いもの勝ちの畜生道である。力によつて自立した王

者も一朝にして力を失へば忽ち强者に亡ぼされ或はその奴隷となり、勢の動くところ戰亂絕間なく修羅道を現出し盛衰無常主權は轉變して止まる所を知らず、權謀術數盛に行はれ、その動くも立つも道の爲民の爲にあらず、悉く我慾に發し、指導原理そのものが地獄的であるが故にその歸する所亦地獄的混亂と苦惱に終り、被治者は屈服するのみで絕對に安心立命なく不安の日を送らねばならぬ。

今や全世界を擧げて此の覇道に墮落し、皇國亦皇道を忘れて覇道を辿り來り、今や漸く迷夢醒めて皇道に復歸せんとする先覺を生ずるに至つた。

覇道の弊害　多數決を以て少數黨の正義を蹂躪する政治、多數を權に少數階級を撲滅せんとする運動、或は黃金の力によつて一世を風靡せんとし、或は捏造輿論を大衆に注入して一代を欺瞞せんとし、大資本は小資本を壓倒し大地主は小地主を呑む、而も强者富者智者が弱者貧者愚者を愛し惠み導かんとする神性と人間味を喪失し、一切を優勝劣敗の畜生道によつて律せんとする、これ覇道の積弊であり、其の窮極する所人類の破滅を來さずんば止まないのである。

今やフリー・メーソンの覇道によつて世界はその金權と言論と列强綜合の武力によつて日本を壓倒し、世界制覇を成就せんとするの時、皇國は天與の神劍皇道によつてこの陰謀毒計たる八岐大蛇を寸斷し、以て自らを救ひ世界救濟の經綸を行はねばならぬ。

今や皇道を求め皇道を唱道する聲鯨波の如く國內に滿ちてゐる。正しくこれ天の聲である。

皇道は天立君主を奉戴せる皇國に於て始めて實現すべき特權があり、王道、覇道國をしてその光を仰がしめ、改過

邇善以て共に天下泰平の洪福を享受せしむる地上天國の建設は、實に皇國民天來の一大責務であるのだ。

皇道・王道・覇道の比較

	君主	治者心境	德	指道原理	皇・王位	國家狀態	被治者
皇道	天立	天意	御稜威神德	公明（神）仁愛（の）勇斷	萬世一系無限天壤無窮	天國	悅服信從安心立命
王道	民立	民意	人德	仁義	有限	中有	悅服・屈服安・不安
覇道	自立	我慾	力	強い者勝優勝劣敗弱肉強食	成衰無常戰亂不斷	地獄	不屈服安

一二、皇道の具現

1 皇道の旗幟・日章旗の尊嚴

皇道はかみながらの道の眞髓であり、萬有一切を統一し安息せしめる根本至上の大道である。而して『皇』の字は『統』の意を有してゐる。古來日本の天皇學の一つである言靈學に於て○に・（ポチ）を描いて◉を『ス』と讀ませ皇道の皇即ちすべるの意を表してゐる。これは萬有一切が　天之御中主大神（皇室の大祖神であり宇宙の主神）なる中心に歸向し之に統一統御せられて其所を得安息し平和を保つてゐる相である。恰も日本晴の大空の眞中に太陽の晃々と輝き給ふが如き相を表してゐるのである。

皇道の四大要素

之を皇道の四大要素たる神君國民に配すれば左の如くなる。

皇大神—萬神統御の神—天照皇大神——日の大神

皇大君—百王統御の君—天津日嗣天皇—日の御子

皇御國—萬邦統治の國—日本皇國——日出る國

皇國民—萬民統制の民—日本人——日本人
大和魂

天之御中主大神の極德を最も圓滿に顯現せられた　天照皇大神は宇宙一切の神即ち八百萬神を統御遊ばされる最尊最貴の皇大神にまし、　日本天皇は全世界を知し召し給ふ至尊至貴の駿津御神にましまし、　日本皇國は全世界を統べ治めるの使命を有し、右の三つの大使命を如實に實現し世界萬民を統制しその幸福を增進し平和を確立するのが日本人の使命である。

日章旗の內包する尊嚴なる意義

而してこの　皇大神も　皇大君も皇御國も皇國民もその凡てが太陽を表象する稱號を持つ。

實に日章旗は右の皇道の四大要素を最も簡明且莊嚴に表現したものであつて、白地は統御せらるべき一切を表し、日の丸は之を統御すべき尊貴なる神と君と國と民とを象徵化した最も神聖なる聖章である。

吾等は祭日軒頭に揭ぐる日章旗を拜し或は竿頭高く揭揚せられる日章旗を拜する時この尊貴なる聖章として之を拜し、皇道の

を說き皇道の旗幟たる事を示す

推擴とその遵奉を誓ひ、日章旗をして全世界を照す太陽そのまゝの光を輝すべく覺悟せねばならぬ。

中心歸向の象　宇宙創造は　天之御中主大神に創まりて漸次具體化し　諸冊二神によつて日本を世界の中心頭腦と造られ、一面　天照皇大神を宇宙統御の神と定められ天照皇大神は世界統一の神勅と共に天孫を日本に降し給ひ、神武天皇は天下一家の大詔を發し給ふ、悉くが中心歸向和合統一の神意聖慮に出でてゐる。この中心が不明に陷らんとするや大化の改新あり、建武の中興あり、又明治の維新となり、更に昭和皇道維新となつて日本を中心とする皇道世界の實現が待望さるゝに至つた。これ等悉くを日の丸の旗に描いて皇道の旗幟となし我等の大精神となさねばならぬ。

萬有光被の象　皇道が◉の道(統一の道)であり太陽道である事は上述する所で明瞭である。十六光條の日章旗は太陽の光熱を萬物に隈なく惠まるゝが如く、皇道の德を以て萬有を光被し、皇威皇德の萬邦に輝き國威國德の宇內に

照徹するを現はされたものである。

之を歴史上の事實に徴すれば、素盞嗚尊の大陸經綸の如き、神功皇后の三韓征伐、豐太閤の征韓、山田長政の遷羅救援の如き、日清、日露の大戰、日獨戰、滿洲上海兩事變、滿洲國獨立援助、さては皇道宣布運動、人類愛善運動日本商品の世界進出等々は悉くこの日章旗の相である。

この光被が戰爭の形式による時、侵略併呑と混同せらるゝ恐れあるも、皇軍は常に正義と自衛の外絶對に動くものにあらず、更に日本の海外進出は覇道によつて壓迫搾取せんとするにあらず、太陽が萬有に光熱を與へて之を育てる如く皇道による世界の皇化であり愛善化である事を忘れてはならぬ。唯世界の平和を紊り人類の幸福を破るものは太陽の光と熱がパチルスを制する如く之を制御するのみである。

日章旗の由來と權威　十六光條の太陽章並に日の丸の日章旗は共に遠く太古(初代鵜葺葺不合尊の御代)に於て既に使用せられたるも中道にして國民一般には忘れられた。而して菊の御紋章は實に十六光條の太陽章を次第に意匠化されたものである。(參考)(天津日嗣の日の御子の御紋章に最もふさはしきものは太陽章でなければならぬ)

日章旗(國旗)の制定は明治三年一月二十七日に於て行はれ、列國に後れて之を定め而も單一無雜にして最尊最貴の日章旗を得たるに反し、列國は頭腦を總動員して而も國民性相應の國旗を造つてゐる。

これ實に日本が大統一の太陽國として世界統一萬邦愛護の大使命を神代乍らに有するに反し、列國は日本に從屬すべきもので全き太陽章を使用するの資格なかりしを實證するものである。

吾等は日章旗に對する毎にこの大責務を覺悟しこの大信念を以て職務に最善を盡さねばならない。

2 祭政一致

近時政黨政治に對する信用は全く地に墮ち、盛に政黨解消の聲を聞く。然も政黨を解消し之に代るに何を以てせんとするのであるか、之が明示に接しないのは甚だ遺憾である。

大藏省事件といはず**綱紀の紊亂**は正にその紊亂腐敗の極に達すと稱すべく、單に政界のみならず教育經濟宗教方面にも浸潤し來り一切を崩壞せずんば止まざらんとしてゐる。幾度か**綱紀の肅正**は叫ばれて而もその頽廢は底止する所を知らない。何を以て之を廓正し救濟せんとするのか？

此の難問題の解決は、國民の悉くが左に謹載する明治天皇の下し賜はつた聖詔を臣子の分として遵奉するによつて忽ち求め得られるのである。

『神祇ヲ崇ビ祭祀ヲ重ンスル』政教の基本を確立し以て『綱紀』を肅正するにある。『祀典ヲ興シ綱紀ヲ張リ祭政一致ノ道ヲ復スル』にある。『惟神ノ大道ヲ宣揚』し『祭政一致、億兆同心』ならしめ先づ『宗教上ニ明カニ』して次に『風俗下ニ美シ』からしむるにあるのである。

明治維新當時の爲政者は歐米の政治樣式模倣に沒頭し物質文明に心醉惑溺して　明治天皇の叡明神に等しきこの大詔を蹂躙し奉り、今日の綱紀の不振を馴致したのである。今にして　明治天皇の聖明日月の如き神智先見に感激恐惶し奉る國民は**異邦の俗惡政治樣式**を輸入して皇國を亂したる罪を悔い猛省一番贖罪の實績を擧げねばならぬ。

若し政黨を解消するも、その後に來るものが再び歐米輸入の皇國に害毒を流すイカモノ政治であつては百害あつて

一得なく　皇祖皇宗に對し奉り謝罪の道は無いのである。

○

近時心靈科學に於ても人間死後靈魂の永遠の生活を實驗によつて認むるに至つた。吾等は無數の體驗により人間の靈魂は勿論、偉大なる神靈の永遠無窮に儼として存在し守護し給う事を知る。――故に祭政一致こそ眞の政治樣式である。

しかし現代の爲政者は神に對して殆ど盲目であるから今遽に神聖莊嚴なる祭政一致の樣式を實現する事は不可能である。故に**過渡時代の一方法**として先づ議場、會議場に　皇大神を奉齋し帝國議會を始め府縣市町村會の議員が明治天皇の詔勅の御趣旨を奉戴して聊かたりとも神の實在に目覺め、神に等しき神聖なる心境に向上し、上翼贊の責を盡し、下國民の慶福を增進するに終始し、私心私情を捨てゝ皇事と國事に勤勞するに努めるならば、現制度のまゝを以て祭政一致の神政に近づき得るのである。

神明の實在とその明暗遠近を超越して一切を照徹し給ふ御稜威を覺り、又人間靈魂の永遠の生命と善惡に對する森嚴なる審判を信じ、更に政治が、神意を地上に敷き施さるゝ　天津日嗣天皇の御天職で、政治にたづさはる人々はその聖職の一部を奉仕するの重責を悟る時、一切の怠漫、野望、不正、黨利黨略の潛むべき影はない。

至誠は神に通じ、正直の頭に神は宿る。正しき直き至誠は　天祖大神並に八百萬の分掌の神に通じ神に等しき公正明徹せる神策を案出し、神明の宿らせ給ふ所人格亦崇高となり、慈愛深く勇斷に富み、大事となく小事となく神に等しき政事を爲す事が出來る。かくて至治泰平の神國日本は建設せられ、之を世界に推擴めて地上神國を成就する。かくて**皇國開闢以來の本格的政治樣式**に突入する事が出來る。

皇國民の悉くも亦皇道に目醒め、皇道を解せず國體に理解なく、敬神尊皇愛國愛民の至誠と實行なきものは代議士たると村會議員たるとを問はずその資格絶無なる事を確認し、之を選擧に反影し、以て**政治の神聖化、皇道化**に貢献せねばならぬ。

祭政一致ノ詔

神祇ヲ崇ヒ祭祀ヲ重ンスルハ皇國ノ大典ニシテ政教ノ基本ナリ然ルニ中世以降政道漸ク衰ヘ祀典擧ラス遂ニ綱紀ノ不振ヲ馴致ス朕深ク之ヲ愍ク

方今更始ノ秋新ニ東京ヲ置キ親シク臨ンテ政ヲ視ル將ニ先ツ祀典ヲ興シ綱紀ヲ張リ以テ祭政一致ノ道ヲ復セントスルナリ乃チ武藏國大宮ノ驛氷川神社ヲ以テ當國ノ鎭守トナシ親シク幸シテ之ヲ祭ル自今以後率幣使ヲ遣シ以テ永式ト爲サン。（太政官日誌明治元年十月十七日）

神教宣布ノ詔勅

朕恭シク惟ミルニ天神天祖極ヲ立テ統ヲ垂レ列皇相承ケ之ヲ繼キ之ヲ述ヘ祭政一致億兆同心治教上ニ明カニ風俗下ニ美ハシ而シテ中世以後時ニ汚隆アリ道顯晦アリ治教治ネカラサル久シ今ヤ天運循環百度維新

宜シク治教ヲ明カニシ惟神ノ大道ヲ宣揚スヘキ也依テ新ニ宣教使ヲ命シ天下ニ布教ス汝群臣衆庶其レ其旨ヲ體セヨ

明治三年正月三日

3 皇道の眞髄・璽鏡劍（口繪三參照）

天津日嗣の日の御子にまします我が大君は　天祖大神より三種の神器を傳承し、全世界の統治者たる御しるしとなさせ給ふ。――この神器の尊嚴なる所以は、それが世界の主師親たる三德（三大極德にしてみいづと稱ふ）即ち至尊の、大御稜威を具現し給う所に存する。

即ち璽は仁慈無限の親たる御德を、鏡は聖明日月の如き師たる御德を、劍は神聖不可犯なる主たる御德を顯はしてゐる。――我が大君は宇宙の主宰神たる皇大神の**主師親の大御稜威**を具現して地上に君臨し給ふ無二の天立君主――顯津御神たる事を表徵して、形ある三種の神器を繼承し給うのである。

天の下四方の國を安國と平けく知し召し（治め）給ふべき御天職を惟神に（神より）保有し給ふ大君は、仁慈を以て御本體となし仁政を施し給ひ、日月の如き明教を以て世界萬民を教化し給ひ、神聖不可犯の神武を以て惡逆を制し正善を護り萬邦を統治し世界平和を確立し給ふ。――故に璽は至尊の**政權**を、鏡は**教權**を、劍は**兵權**を表現せられてゐる。

皇道の三大方面

璽鏡劍は又皇道の眞髄を現す。即ち人爲にあらず天地の主なる　皇大神の定められたる大道を表現してゐる。

璽は和合統一を表してゐる。萬物悉く中心中樞あり之に統一せられて平和を得幸福を得活動と健康を得てゐる。太陽系天體は太陽に、元素陰電子は陽電子に、細胞の原形質は核に統一和合してゐるが如きである。故に人類の世界に於ても統一和合ある所に平和と幸福とは自ら來り、不和反目ある所に戰亂と慘禍と自ら起るは神の立てたる神律である。

鏡は萬物が相對的に心を、力を映發しあひ又相關係しあふ事合せ鏡の如くなるを表されてゐる。神と人、陰と陽、天と地、靈と體、陰陽の電子の如きはそれである。互に善意を以て相對し、助け合ひ補ひ合つて双方の向上進歩を促し幸福平和を增進する。國と國と、團體と團體とは文化、經濟、宗教、思想を映し合ひ、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友上下等々各此**相關映發鏡**の德によつて人格と神格とを研き上げるものである。此の兩者が惡意を以て對立する時そこにあらゆる不祥事が續出する、これ亦神の約束である。

劍は萬物が他に對して働きかけ（能動）動かして行き或は自らの意志のまゝに實行する所の意思や生命力や靈氣などの閃めきを象徵化されたものである。而して萬物は一定の神律軌道或は法則に從つて動かねばならぬ。之に反し勝手氣儘に振舞ふ時は衝突し混亂し破滅するが故に、常に神律に從ひ正邪善惡、本末枝葉を明かに裁斷して法則に從はしめる威力が劍の働きである。

璽鏡劍によつて象徴せらるゝ皇道の三方面は何れも神の定められたる天地根本の法則であつて之に從へば世界も國家も國體も一家一身も悉く幸福に平和に、之に反すればそれ等悉くが苦しみ亂れ衰へ亡ぶ、無言の大威力を備へた大道であるのだ。

璽鏡劍三位一體

璽鏡劍は前述の如く　皇大神と至尊の大御稜威の三面を表し、又大權の三方面を表現する。故に三位一體不可分のもので相倚り相助けてその大德を全うすることはいふ迄もない。例へば瑞寶章の如く璽と鏡と劍とが一體となつてこそ、その全力が現れるのである。これ國家總動員の姿であり擧國一體の姿である。

臣民の立場からいへば璽は**政治家の職責**であり、國民の統一和合を實現し、自主公明の外交を遂行しなければならぬ。

鏡は**國教**であり(皇國本來の教育であり宗教であり)皇道の教の方面に當り教育宗教關係者の責務である。宜しく皇道を宣揚し全國民の精神を總動員して皇道精神(日本精神)を輝かさねばならない。

劍は**軍備**であり、精神形體共に國防を完備し、國民皆兵の實を擧げて外、列强の侮りを制し內、神洲の安泰を確保し更に進んでは東洋、アジア、世界の平和を亂し、可憐なる弱小民族を蹂躪する惡魔の軍を懲さねばならぬ。

この**璽鏡劍の三者政教軍**が步調を揃へてこそ皇國は榮え富國强兵正義を宇內に貫徹する事が出來るのである。若し此の三者にして互に相反目し甚だしきに至つては互に相爭ふが如き事あらば國力は衰退し外侮を招き、至尊の三大極

德を瀆し奉り、皇國民として神と君とに對し奉り、又祖先に對し申し譯の辭もない事態が發生する事必然である。故に國民の悉くが璽鏡劍の御稜威にあやかつて智仁勇の三德をみがき、政教武の一致協力を密にして皇國の國是を貫徹し光輝を增す如くつとめねばならぬ。

第一線と第二線

平時にあつては璽と鏡とが表(第一線)に立ち諸外國と親善を深め、外交工作に力を注ぎ、公明なる道によつて進まねばならぬ。而もその背後(第二線)に神聖不可犯の劍を備へて覇道列强の野望と威喝を封じ正義の貫徹を期せねばならない。

非常時にあつては鏡の智と劍の勇とが當然第一線に立ち、而も第二線の璽の神愛を原動力として動かねばならぬ。殊に**戰時**には劍が第一線に立ちその背後(第二線)に璽と鏡が控えて之を支援せねばならない。かくて劍はよく仁愛によく公明に、救國救世活人の利劍となつて世界の平和を確保するに至るものである。

一三、結　言

皇道日本より皇道世界へ

——天下一家の春——

（口繪一參照）

皇道に就ての一通りの解說は既に終つた。

之を要するに、皇國民お互は、この萬國に比類なき最も徹底せる大道——皇道によつて、政治家も、經濟家も、宗教家も教育家も思想家も、又、軍人も農民も勞働者も、地主も資本家も國民の悉くが、外來の誤れる一切によつて培はれた醜い賤しい穢れたる一切を淸算して、**神樣中心卽ち天皇中心**、國利と民福との爲めに一致團結して、天下一家の春の如き美しい皇道日本を造り上げ、過去の政教によつて行詰まれる世界、惱める人類に輝かしい模範を垂れねばならぬ。

更にこれを推擴して全世界に及ぼし、國籍、人種、宗教等を超越して相和し相愛し　日本天皇を家長と仰ぎ、全人類を家族として、平和の榮光に輝き、幸福の歡喜に滿ち〳〵たる一大家庭を築き上げねばならぬ。

この大家族こそは皇道日本であり、愛善世界であり　**皇大神**の天地創造以來、夜晝、暑さ寒さの分ちなく御苦勞遊ばされた最終の御目的であり　**皇祖皇宗歷代**の聖天子が夢寐にもお忘れなく御軫念遊ばされた肇國の大精神大國是であり、又、モーゼ、釋迦、孔子、基督等**諸聖を始め幾多宗敎の敎祖**が、これが爲めに生命を捧げた大願であり、何千億萬とも數限りなき過去の悠久なる世界に住んでゐた**我等の先祖である全人類**悉くの待望した大理想の世界であるのだ。

天運循環この大理想が、皇國民お互の擧國一致の獻身的努力によつて、今や將に生れんとする其の時が來たのである。現在、皇國の眼前に横はつてゐる大國難こそはこの大理想世界の生みの難みであるのだ。

この大國難は悲しむべき國難ではなく、之を皇道精神、皇道國防、皇道外交、皇道經濟等々、皇道によつて一蹴し去つた曉には、日本皇國は世界の指導者となるのであつて、今や日本は皇道日本と皇道世界を建設すべき勞作の中途にあるのだ。

願はくは皇道の大精神に立脚して、堂々眞正日本人の步みを步み、天下一家の春を招來して、歡喜と幸福に滿ちたる國家と世界を建設して、神、君、國、民に報い、その喜びを子孫永遠に傳へられん事を。

跋に代へて

本書は肇國の大精神を明かにし皇道の根本義を闡明せんとする根幹的問題を主として取扱つた爲、枝葉の問題には殆ど觸れてゐない。又史實の引用に於ても既に定評あるものに就て述べたので、滿洲事變以來發生した幾多忠勇義烈の事蹟を記述し得なかつた事を遺憾とする。この皇道の根幹より咲き出でゝ新に絢爛の美を競ふ善行美擧こそは、確かに近代人の琴線に觸れる皇道の新しき精華である。

しかし百千年の間、無數善行美擧の中から擇り拔かれて燦然たる不滅の光と共に存するものが定評ある事蹟である。編者は寧ろ萬人の知るこの古き史蹟によつて深刻なる教訓を受け强烈なる激勵を與へられるものである。楠公父子の忠烈の如き、三十年一日の如く、幾度讀むも感涙に咽ばざるはない。その精神を味ひその眞髓に觸れる時、時の古今、時勢の變移の如きは大なる問題ではないのである。況んや古今に通じて誤らず中外に施して悖らざる大皇道の事蹟に於てをやである。

新しき忠勇義烈傳に就ては他日を期し、左に跋に代へて若干を述べて此の卷を終る事とする。

1. 爆彈三勇士

君臣の分明かに、公私の別亦明か、一意君國の爲、公の爲我身を犧牲として之に殉ずる忠君愛國の實行こそは皇

國日本の華であり光である。我身を爆彈と共に碎いて友軍戰捷の血路を開いた爆彈三勇士こそは正に我が國民の亀鑑であり武人の典型である。

伊太利の首相ムッソリニは、爆彈三勇士を盛にもてはやす日本の傾向を觀て『日本軍はそんなに弱くなつたか？』と嘆息した。その理由を尋ねられて『日本軍人は悉くが爆彈三勇士の如きものであると信じてゐたのに、三勇士がかくも大切がられるのは、皆んなが弱くなつた證據ではないか？』と答へたといふ。

然し日本軍人はムッソリニの期待の如く悉くが爆彈三勇士である。そして日本國民が爆彈三勇士を尊ぶ所以は、全く國民の爲さんと欲する所を實行して吳れたからで、いはゞ自己滿足といふべく、斷じて稀らしいからではない。實際三勇士に劣らぬ勇士は多數に表れてゐるので、その戰死の刹那が華々しかつた爲に三人が代表として讃美の的となつたまでである。即ち三勇士は全軍忠烈の總代表として重きを爲してゐるのである。

日本精神の體現として更生した今日、いざ戰爭となれば、**海軍空の爆彈三勇士**は爆彈と共に敵主力艦航空母艦に着艦せんと待ち構へて居り、海の勇士等は驅逐艦潛水艦或は小艇によつて敵の大艦と一騎討をやるのである。

更に陸軍に於ては空の爆彈勇士、地上のタンク勇士は敵の旗下にまつしぐらに切り込んで敵主將の首をあげる。

思想戰、經濟戰、政略戰、外交戰に於ても皇道精神をかゝ、だ一杯に塡め込んだ勇將猛兵が續出して凱歌を擧げる。

此の如く身命を賭して職分を盡し、君國と一億二千萬同胞に殉ずる有形無形の力が、克く皇國自らを救ひ、世界を平和に治めるのである。

2. 純忠至誠乃木將軍

乃木將軍の純忠至誠は何人も敬服する所で今更多言を要しない。

『生命はもとより大君に捧げたもの』とは何れの軍人も常に覺悟してゐる所であり、心ある國民亦之を期してゐる。然るに彈丸雨飛の下にあつては容易にそれが行はれるのに反して、無事泰平の御代には却つて行はれ難い。平時はどうしても自我心が先に立ち、奉公の赤誠は兎角第二線に退き勝ちである。

乃木將軍が功成り名遂げて萬人に敬慕せらるゝ身を以て、太平無事の時、　明治天皇に殉死せられた至誠純忠は眞に尊いものである。

聯隊旗を再授された**西南の役**を偲んでは君龍の限りなきに咽び、二萬の同胞を護國の神と化した**旅順の攻圍戰**を追懷しては、亡き同胞とその父兄を思ふの情切々たる將軍の胸は燒金を當てるが如く『一將功成つて萬骨枯る』との古人の詩に幾度か涙せられた事であらう。夢寐に忘れぬ大君の御仁慈と國民同胞の赤誠に酬ひんと常に努力せられた將軍は、御大葬の當日遂に殉死によつて最後の至誠を披瀝して　明治天皇の尊靈に從はれた。

うつし世を神去りましゝ大君の
　　みあと慕ひてわれは行くなり

將軍が生き永らへて君國に報ひられる事も亦尊い存在であつた。しかし太平の時、一死以て大君に殉ずるの活模範を示された事は、永遠に無數の第二の乃木將軍を產むこと獨福公の湊川に於ける忠死と等しきものがある。

君國の恩寵によつて安穩に餘生を送る人々は、上君龍の厚きに酬ひ、下同胞の勤勞を多とする爲、乃木將軍の心を心とし、決然起つて非常時克服に邁進しなければならない。筋骨未だ活動の餘力ある人々に於て殊に然りである。

3. 銃後と戰線

戰場に於ては內地の同胞から至誠の結晶として送り屆けられた慰問袋程、將兵の心を慰めるものはない。

滿洲に出動して匪賊討伐に東奔西走偉功を奏した宇都宮第十四師團の某隊にも慰問袋が分配せられた。一人の兵士が貰つた袋を開いて見ると驚くべし、ライオン齒磨の小袋が一つ、古ぼけた雜記帳一册、さん〳〵使つて短くなつた鉛筆が一つ、それだけであつた。而も雜記帳は殆ど書き潰してあり、白い紙とては數枚に過ぎなかつた。

もと〳〵大した望みはかけてゐない慰問袋である。精々五十錢から一圓位の中味が普通である。たゞ送つて下さる人のまごころが嬉しいのであり、內地から屆けられた事が懷しいのである。しかしこれは又餘りといへば餘りであつた。兵士は一種の侮蔑をさへ感じて捨てやうかと迄思つたが『待てッ』と心の囁くまゝに思ひ直して袋の底を探つて見ると手紙が出て來た。それには覺束ない文字で左の如き意味が綴られてゐた。

『滿洲の兵隊さん、さぞかしお辛い事でせう。あなたがたのお蔭樣で私たちは安樂にくらさせて頂いてゐます。何とかして御禮の心持をお屆けし度いのですが、**私にはお父さんがありませぬ**。お母さんと二人暮しで、お母さんが日稼をして、私は小學校に通つて勉强してゐます。この品はまことに失禮なものですが、私たち母子の力一杯ですから、お腹を立てずにお受取り下さい。さうして御體を大切に國家の爲めに働いて下さい。』

そしてそれは茨城縣の或村の尋常四年の少女であつた。

たまらなくなつた兵士は身を震はして遂に泣いた。『ア、、濟まなかつた。一瞬間たりとも恨んだのは私の未熟からだつた。どうか赦してくれ!!』彼は心から遥かに少女に詫びた。『力一杯でこんなものしか送れない貧しい暮しをしてゐるのなら、定めし三度の御飯も滿足に食べてはゐないだらう。學用品も定めしみじめなものであらう。さうだ、俺は生命も金も要らない。給料の蓄へが十圓餘りもある。之をこの少女に贈らう。』

かく決心した兵士は少女の村の校長さん宛に『この可憐な少女にこのお金で一度でもよい嘆かい白い御飯を食べさして上げて下さい。新しい雜記帳も鉛筆も買つて上げて下さい。又この聖い心を汚さずに立派に成人して天晴な日本の女になるやう指導して下さい』と一伍一什を打開けて送金した。

校長さんからの通知によつて始めて此の話を知つた新京憲兵隊長小山中佐は『此處だ日本の強味は』と感動の餘り之を新聞記者に話す、新聞に載る。『その兵隊さんに上げて下さい』『その少女にやつて下さい』と彼方からも此方からも感激のお金が集つて忽ち百圓に達したので、憲兵隊では之を切半して五十圓を兵士に五十圓を少女へ送金した。

間もなく『私は**天皇陛下の御爲お國の爲**、同胞の代表となつて戰場で働くもので、お金なんかは要りませぬ。このお金は是非彼の可憐な少女にお送り下さい。さうして彼女が、立派な大和撫子と育て上げられる經費の内にお加へ下さい』と認めて兵士は之を送り返した。

憲兵隊では兵士の赤誠に感激し、涙と共に再びその金を少女のもとへ送り屆けた。

明治天皇御製

國をおもふ道に二つはなかりけり
いくさのにはにたつもたゝぬも

愛國の至誠より逃り出て、この兵士を思ふ少女の心、この少女を憐む兵士の心、この二人が代表する銃後の至誠と出征將兵の忠烈とが皇威を宇内に宣揚し、又平和の樂土を滿洲の野に擴げて行つたのである。

4. 至誠の一厘

小さいものが別々に散らばつてゐては大なる力とならないが、集ると大した働きをするものである。一つ/\の雨滴は塊を破る事すら出來ぬが、集つて小川となれば筏舟を泛べ、大川となり遂に大海となれば三萬五千噸の戰艦を泛べ、一度激すれば之を木の葉の如く飜弄する事も出來る。

國民の一人々々が持つてゐる小さな力、小さな誠、小さな愛國心も、それが離れ/\になつてゐたのでは大した働きは出來ない。之を　天皇中心に大きく集めて大海の樣な働きをさせるものが擧國一致であり億兆一心一體であるのだ。

例へば金の一厘など眞に僅な微なもので殆ど役には立たないが、この至誠の一厘が集る時、そこに偉大なる力が生れる。

今七千萬の心ある國民が毎日心掛けて必ず一厘を献金する。十日に一錢一月に三錢であるから一月三錢として取扱ふのが便利である。而もこの一厘の献金が全國で一日七萬圓となり一月二百十萬圓となり、一年二千五百五十五萬圓

となる。

海軍　この雨の一滴の様な各自の至誠の一厘を一年分集めて出來た二千五百五十五萬圓は、恰も大海の如な力となり、よく一等潜水艦二隻を泛べ又一等駆逐艦三隻を走らす事が出來る。

海戰の幕を切り落すべく飛翔して敵の空中勢力を撃滅し太平洋の制空權を握る空の勇者九〇式艦上戰闘機三六五臺は安々と一年に産み出される。

愈海戰酣となる時敵艦を撃沈する原動力である五十三糎の魚形水雷、十六吋砲の巨彈も多數に之を準備する事が出來る。又海戰の花形一萬噸巡洋艦を二年に一隻、那珂級輕巡洋艦を一年に一隻の建造も出來る。

陸軍　一厘献金の一年分二千五百五十五萬圓は、陸軍の精鋭九一、九二式戰闘機三百六十五臺を造つて大陸制空權の獲得に威力を添へ、輕戰車を造れば三百臺立所に成つて大陸を席捲する。消極的に七糎半高射砲一千門を造れば空を守る事も出來れば、鐵兜を造れば二百萬皇軍の頭を護るに足る。一ヶ師團維持費四百數十萬圓、然らば優に五師團の維持も出來る。極東の風雲甚だ急なる今日、或は二年に一個師團の増設、一年に一個の飛行聯隊を新設する事も出來る。

民間事業　右の献金は急迫を傳へらるゝ農村並に中小商工業者の救濟に振り向ければ聊か應急の用を辨じ、平戰兩面に重大なる貢献をなす民間航空に振り向くれば、航空港或は防空飛行場を建設し、或は旅客機フォッカー六人乘に換算すれば三百六十五臺、ブスモス輕飛行機八五〇台に相當する威力を持つてゐる。

同胞一體の力　滿洲事變勃發以來勝勃として更生した日本精神の發露によつて献品献金相次ぎ飛行機の如き陸海

併せて百八十機に達してゐるが、滿三年に亘る献金献品の總額は約二三七〇萬圓で、一厘献金一年分に遠く及ばない。而も日露戰役間の献金献品總額は滿洲事變滿一年後のそれに遥かに及ばないのである。

神聖なる國民運動　一國の興廢は國民精神の振と不振と、その勤怠と結束の如何に關するものであつて、國民一齊に起つて手を握り合つた強味を右の實例は明かに訓へてゐる。これ神聖なる國民運動の必要なる所以である。

お互の一日一人一厘の至誠一年の集積すらこの偉大なる實力を發揮する。一日二厘三厘を積み得る人も多數であり、富豪の如きは一日數圓を献金する事は貧者の一厘より容易である。更にお互の持つ有らん限りの力と誠とを總動員すれば、克く國を興し克く敵を制御するに足る。

吾等は　天皇を頭首と仰ぐ一心同體である。　統一和合の大道皇道を率じて結束して起たば、内憂外患の一蹴は易々たる業であり、悠々和樂のうち國防の缺陷を除き、同胞の憂みを排除し共に萬邦無比の國體の精華を永く樂しむ事が出來るのである。

この偉大なる同胞一體の力を忘れて内に相爭はゞ、内、生活の不安を増大し、外、對外實力を銷磨して、國を亡ぼさない迄も國辱を招く事必然である。

吾等はこの國家興隆の最大要件である擧國一致の具體的訓練として、萬人の行ひ得る至誠の一厘献金を提唱するものである。

一君萬民一體の大家族日本　皇國民は大局より見れば、その血統に於て大宗家たる　皇室の支流であり、その傳統する精神（靈統）に於て、天上の儀の如く地上を神國として平安に治め給はんとする神意と聖慮とを實現するに一致

する。故に神意と聖慮と民意とは根本に於て一體である。

又皇道に立脚する所、忠孝が一致であるばかりでなく、信仰も愛國も悉くが忠孝と一致する。天皇の勅命は即ち神勅に一致し『殺す勿れ』『殺生禁斷』等の戒律によつて忠君愛國の實行を束縛される矛盾は斷じて無い。億兆一心擧國一致、全世界の爲にその美を爲す事皇國日本の如く容易なる國は他に絶無である。

天皇を大家長と仰ぐ一君萬民一體の大家族日本、天皇を大頭首と仰ぐ君民一心同體の大神人日本、これこそ皇國國體の精華であり强味であり尊貴である。これこそ世界讃仰の的であり、世界の指導者たる一大資格である。

切に同胞の覺醒と奮起と結束とを祈つて筆を擱く。

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十日發行

皇道宣揚
定價貳拾錢

編輯兼發行人　京都府龜岡町大字荒塚小字内丸一番地　昭和青年會
代表　有留弘泰

印刷所　京都府龜岡町大字荒塚小字内丸一番地　天聲社

發行所　京都府龜岡町天恩郷　昭和青年會
振替大阪七四六八八番

興隆日本
皇國臣民の指導精神

皇道の栞

有留弘泰著

皇道時代
天孫民族
座右の指針

◉現代日本の國難は、皇國精神界の太陽であり皇國本來の活生命である皇道を、物質萬能歐米心醉の岩戸に押込んで了つた報ひだ。

◉皇道を岩戸から引出して明るい日本、明るい世界を建設する、それが本書の使命である。

◉本書は『皇道日本』『皇道世界』建設の爲、全生命を捧げて野に叫ぶ『皇道宣揚』の編者である著者が心血を注いだ皇道への栞である。

◉『皇道宣揚』の讀者は是非とも本書によつて更に系統的に皇道の眞髓を體得し、之を體現實行せられんことを希ふ。

ポケット型五三〇頁
防水クロース美本
定價四拾五錢

發行所 天聲社 振替大阪 七五九一七番

京都府龜岡町天恩郷

終